女鑑

[illegible]第五回發行

第百拾號

東京國光社

女鑑第百拾號

目録

丹波の孝女



女德と學藝

女德と學藝とは、必ず相伴ふべきものなるを、世にはいぶかしくあやしくおぼゆることと、やゝ相伴はざる如きけしきある事なり。世にはさるべき道を、ふみもまなびもし、或は、世に一かどの藝術を修めも研きも爲したるほどの女子が、とかくに、女德の完からず、とゞのはざるけしきあるは、いといぶかしき事にあらずや。正しき道をふみ、美しき藝術をおぼえたるほどの者ならば、其の女德も、自ら正しく美しかるべきものを、さなきものあるは、いといぶかしき事にあらずや。

今のみにはあらず。いにしへにも、才藝めでたく優れてきこえたる女子の、なかに、女德はいやしく、くちをしく劣りて見えたるは、史にも物語りにも、多くきく所なり。されど、昔の人を責むるも、今はやうなし、責むべきは、今のさる女子なり。學問も、近くわがのみを、きはめしにあらず、遠く西洋の道をさへふみも考へ、あはれなる歌をもよみ、めでたき文をもつゞり、やさしき少女子たちの敎への庭をも

あづかりて、訓へも導きも守りも爲すべききはにさへ立てる女にして、何事ぞや、やさしく良人に仕ふべき道を知らず、うつくしくわが子を育つべき道を知らず、傳みかしづくべき良人にむかひて、なほざりにのみふるまひ、いつくしみ守るべきわが子の家庭を、かりそめにのみふるまひ、たゞいたづらなる歌文章を書きほこりて、われこそ優れたる女子なれといふ顏したる如き、甚しきは、身の起臥さへ正しからず、おぼろ月夜にあだなるそゞろありきの名さへうたはるゝ、如きがあらむとは、學藝と女德との相伴はざる事の甚しき限りならずや。

又、畫かくを見れば、花の色、月のにほひ、世にもやさしう美しう見ゆる婦人が、わが治むべき家事も、わが守るべき家庭もうちすて去りて、露ばかりかへりみず、朝夕の事を、なかなかに、良人にうちまかせて、おのれは獨り思ふまゝほしきまゝに、わがまゝに起臥して、しかも、良人よりもまさりて酒のみのゝしるがありといふ。すさまじくも、あさましくも、世にまことどころはおぼえぬなれ。

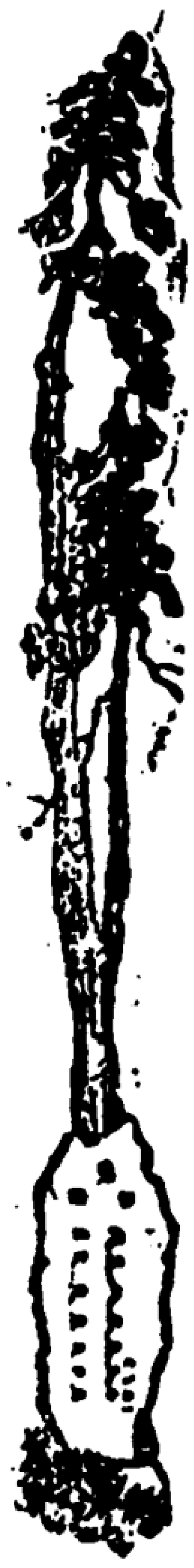
かゝるをいみじきものとて、なほ、さまではあらざれど、學問技藝ある女子の、女子たる德の缺げたる者はいと多し。とかくて言葉多く、[illegible]

立居振舞やさしからず、やゝもすれば、行状みだりがはしく、われはといふ顔高くてゝつねに人を見さけ、人を人とも思はず、すべて、心の固からず優ならず、行ひのやさしからず、たしかならず、女德の堅固ならざるが多きやうなり。

學問と女德とは、斯の如く兩立する能はざるものなりや、斯くまでゝ相伴ふを得ざるものなるか。決して然らず。必ず相伴ひも双びも立つべきものなり。これらは、畢竟、女子といふ者は何なる者なるか、日本の女子は何を志すべく、何を爲すべく、何を勉むべく、何を守るべく、何をわが本分とすべきかを忘れたるか故に、かゝるあるべからざる醜きさまには墮落するなり。

日本の女子の本分は、細にいはゞさまぐ～あらむも、せむずる所は、やさしくうるはしき子となり、やさしく正しき妻となり、やさしくかしこき母となり、さてこそやさしくうるはしく正しく賢き民となるが、日本の女子の本分なり。女子が高尚なる學びの道をふむべきも、また、優美なる藝術をならふべきも、たゞ、此の女子の本分に達せむが爲めなり、高尚なる學問をきゝ、優美なる才藝をおぼえて、此の本分にそむかざる誠の女子とならむとするなり。それが學藝の目的なり。それゆゑに、學

問も要あるなり。才藝みがくべきなり。かくて、やさしくうるはしく父母に仕へ、やさしく正しく夫にかしづき、家を理め、やさしくかしこくも子をいつくしみ育て、やさしく誠なる日本の民となるべき道德、智識、思慮、行狀、品格を得むとするなり。これはあらずば、學問も藝術も、更に問ふべき習ふべき磨くべき要なきなり。さるを、此の女子の本分、また、此の女子の本分に達せむ爲めに、學問も藝術もあるなるをうちわするゝが故に、さる女德なき人とはなるなり。謹みたまへ、女子たち。いかに畫に堪能なるも、音樂に妙なるも、文章は上手なるも、學問に達せるとも、父母にやさしからず、良人にまめならず、家事にうとく、家庭に切ならざる者は、誠の女子にはあらぬなり。



論説

島の曙（つゞき）

肝付兼行

又、世界圖を見て、日本の版圖を目し、其狹小に嘆息しない我國人は實に少ない樣に見受けますが、成程、露西亞や、支那の版圖などに比較すると、日本の版圖は狹いに違ひない。併ながら、我は之を以て深く嘆息するには及はぬと思ひます、夫はドゥ云ふ譯かといふに、國の强弱は、決して其版圖の廣狹に由るものではない、即ち、人口の多寡疎密、文化の進歩不進歩に由る者である、故に此の要素さへ具備して居れば、版圖か狹いからと云うて、何も憂ふることはない。即ち、あの英吉利は、世界第一流の富强國でありますが、其國は如何なる國でありますか、世界の各大陸に、廣大なる屬領は持て居りますが、此の膨脹をした本國は、二の島より成立つた島國で、其の地位は、北緯五十一度が其南の端、即ち、我が北境の占守島の緯度が、彼の南端に當りて居る、そして其面積は、我の里數で、二萬四百方里に過ぎんのである、然るに、我が邦の面積は、從來の分が二萬四千七百九十四方里、今度新に加はつた臺灣が凡そ二千百六十四方里、澎湖嶋が八方里でありましたから、合して二萬六千九百六十余方里である、即ち、英吉利本國の面積は、我の七割六分計よりないのである。

又、人口に於ては、世界で第一は清國であるが、清國は何分强國中に數へることは出來ぬから、取除として、露西亞が第一、即ち、凡そ一億二千萬、次が北米合衆國で、六千三百六十萬、第三が獨逸で、四千九百萬、第

四が墺太利で、四千二百萬餘、其次、即ち五番目が、日本である、併し現今では、能く調べて見たなら、墺國を凌きて、第四番かも知れぬ、英吉利、佛蘭西の如き、本國丈では四千萬に滿たぬのであるから、我が國には及むぬのである、殊に伊太利に至りては、三千萬に少し越す位であるから、我よりは著しく少ないのである、故に、我が國の人口は、其多寡に於ては、十分に世界の強國たるへき數量を具備して居るのである。而して又、其疎密に於ては、是亦支那を取除けとし、世界の文明國中では、白耳義が第一番で、我が一方里に三千百五十人、二番が和蘭で、一方里に二千二百餘人、三番が英吉利で、一方里に一千八百六十八人、四番が我が國で、一方里に千六百五十六人、五番が伊太利で、一千五百九十六人、即ち、白耳義が一番でありますが、白耳義は極小な國で、丁度我が九州の六分通り、而して又、和蘭も漸く、九州の七分通りに過ぎぬ小國でありますから、我が國や英國等に並び立てむ比較にはならぬであります、乃ち、我が國中でも五畿内を限ると、一方里に五千六百人、又白耳義や和蘭等よりづつと廣い所の、東海道丈を限りても、一方里に三千五百人で、其外島々では、仝じく一方里に、淡路島が五千二百人、天草の上島が五千人、壹岐の島が四千四百人であるから、白耳義や和蘭より密なる地方は幾らもあるです、故に人口の疎密に於ては、世界の大國中で、英國が第一、我が國が第二である、故に、是亦世界で第一流の密度を有して居るのであります。

又彼の、歐羅巴の南岸、亞非利加の北岸、及亞細亞一小部の海岸で形造りて居る所の、地中海は、世界海上の中原でありますが、英吉利が世界、殊に此中原に、海上權を擅にして居るのは、ジブラルタル、マルタに海鎭を有し、蘇士運河の航通權を我がものにして居るのに基くのであります。ソコで東洋未來の中原、否地中

海は、日本海、及黄海、東海の三海であると思ひますが、然らば、我が津輕海峽が、彼のジブラルタルに當り、對島が、彼のマルタに當り、而して臺灣海峽が、幅はちと廣すきるが、地位上、ドウしても、蘇士運河であらねばならぬ。而して、彼の英國は、ジブラルタルとマルタころ其領地なれ、他は皆外國である、然るに我が帝國は、三要關、皆、自國續で之を所有し、該海の大洋面を全く墻塀にして居るのであるから、英國に比べて、其利點の優りて居ることは、私の辨を待ずして分ることゝ信じます、只四隣の開化が、まだ西洋に比べて後れて居るから、人智の點に於て、各事にまだ幼稚な所を免れませぬが、天然の地位、地形、氣候等に於ては、則ち現今世界の富强國中で、第一に指を屈せらるゝ所の、英國に優りて居るとも決して劣らないのであります。之を製造物に譬へて見るに、凡そ物を製造するには、材料と技術とを要しますが、我が國は、即ち、其材料には十分富んで居るのでありますがら、其技術さへ慥になれば、ドンナ物を製造するにも、少しも差支はないのであります、故に、是より益々發達させなければならぬのは、其技術、即ち、人智であります、要するに、國家を經營する、有形の要素には十分富みて居れども、此の有形の要素を利用してゆく、無形の要素に乏しいのでありますから、其天賦の海國たることに目をつけ、海國的の要素を利用するやうにするのが何より肝要であります、是れ私の、我が國民の爲に、海事思想に最も重きを置て、常に愚言を喋々する所以であります。

是から、今申した人智の働きにつき、世界の富强國と、彼我如何なる對照をなすかを述べて見ませう。

先づ、海國の兵力として、海軍のことを第一に御話致しますが、世界第一の海軍國は英國である、即ち、英國は百四十二万噸の海軍を持ちて居るのであります。

偖、只噸といふては、どの位の量で、ドウいふことを謂ふものやら、定めて御分りになるまいと思ひますし、又船艦の噸數位のことは、海國の女子として、是非御承知置ありて然るべきかと存じますから、甚だ枝葉に渡りますけれども、序ながら御話致して置きます。

偖、船艦の噸量は、商船では「トンネージ」と申して、貨物の積量でありますが、軍艦では其排水量、即ち、「ディスプレースメント」で、ツマリ其船全體の重さであります、即ち、其船が水面より下に入りて、排けた水の重量とさへ視て居れば間違はないのであります。收容軍艦鎭遠の噸數は、七千三百三十噸で、吉野の噸數は、四千二百十六噸であるから、誰でも其排水量であることを知らぬ人は、鎭遠の方が大きな船で有らうやうに思ひますが、其實吉野の方が船は全く大きいのです、即ち、吉野は幅は四十七呎でも、全長は三百九十呎あるのであります、然るに、鎭遠は、幅は五十九呎で、吉野より廣いけれども、其長さは三百八呎半であるから、ざつと八十一呎半短かいのであります、併し鎭遠は甲鐵の戰鬪艦で、吉野はタヾの巡洋艦であるから、其全躰の重量、即ち、水中に入りて排ける量に於ては、鎭遠は、吉野よりズット重いのであります、是、其排水量に、三千噸餘の違ひを視る所以であります。故に要するに、商船に於ける噸數の多少は、即ち、之を其積量の多少、取りも直さす、船体の大小と視て宜しいが。軍艦に於ける噸數の多少は、先づ、其防禦力、及戰鬪力の多少と視るが正當で、船躰の大少とは視られませぬ。即ち、巡洋艦は、其名の如く巡洋の便、即ち、其速力の大にして、航海の長く續くことを主とするか故に、船躰を務めて長く輕く、且つ容積も廣く造りませんければならぬから、自然に薄き鐵鈑、又は鋼鈑で造らなければならぬ、是、其輕い所以である。又戰鬪艦は、其名の如く戰鬪を主とし、即ち、

戰鬪力と、防禦力とを主とするが故に、巨砲は勿論、先づ、第一に厚き甲鐵鈑を以て造らなければならぬ、是其重き所以である、即ち、鎭遠の鐵鈑は、最厚き部にて、一呎二吋弱でありますが、吉野の鐵鈑は、全躰に五六分位に過ぎぬのであります。又鎭遠の實馬力は、僅に六千二百に過ぎぬのに、吉野の實馬力は、一萬五千である、結果は、其速力に於て、一時間に十四浬と廿三浬との差ひがあるのであります。噸數の事はこれで大抵御分りでありましやうから止めますが、世界で、第二番の海軍國は、佛蘭西で、其噸數は凡そ六十五萬噸、三番が露西亞で、三十四萬噸、何れも、尙、漸々に新造のものが殖ゑる見込であります、四番が伊太利で、二十九萬八千噸、五番が獨逸で、凡そ二十六萬噸。六番が北米合衆國で、二十二萬噸餘、七番が西班牙で、すッと下りて十四萬噸、其他は一々に記臆しませぬが、段々減じて往きまして、我が日本は、戰爭前までは六萬噸計の現在で、世界の十二番目に位して居りました、然るに、今度戰爭の結果數多の收容軍艦、又購入した軍艦等が殖ゑましたから、之に尙、目下英國で製造中の、富士號、八島號、(各一萬二千餘噸宛)又巡洋艦、明石號、須磨號、其他製造中の、未だ命名なき所の報知艦等を加へますと、凡そ十二萬噸となりますが、噸數では、先づ、世界で、第八番といふことができるのであります。偖、是は寔に、我が海國の爲めに喜ぶべく慶すべき進運でありますが、然らば、之を動かす處の財力はドゥであるかと、是に眼を着けまするに、世界で軍事の爲に金を費すことの最も多い佛蘭西では、最近の統計に依ると、海軍の年費に、我が一億四百七萬圓、陸軍の年費に、仝二億三千三百萬圓を費して居ります、然るに、我が國民が是れまで、海陸軍の爲に、年々支出して居る金額は、どれ位かといふに、二十八年度の豫算では、其經費が一千八百八十七萬圓、臨時

費が、千九萬圓計と記憶して居ります、去れど、合計二千八百九十六萬圓計でありますが、彼我を對照すると、我は彼の先づ十二分の一により當りませぬ。尚是を解りよいやうに、國民一人の頭割にすると、佛蘭西人は、陸軍に六圓、海軍に二圓七十一錢、都合八圓七十一錢負擔することになります、ソーして我が國人はといふと、經常費丈では陸軍に三拾二錢、海軍に十三錢余、都合四十五錢を負擔することになるのでありま す、尚臨時費を加へましても、陸軍に三十六錢、海軍に三十二錢六厘、都合で六十八錢六厘によりなりませぬ。併しながら、歳入に對すると、其支出は、決して少いと云ふ譯ではない、乃ち、金銀貨の違もあり、又生活上一概に謂はれぬ事情もありまするが、つまり、全躰の國の富度、則ち、財力に乏しいのであるから、之を豊かにする道を開くよりは、他に如何とも致し方がない、故に我が海軍も、外形上では、世界第八番目に進んだが、何しても、是からは、實戰をするにも、尚擴張するにも、財力が乏しくては何事もできない、ソコで是から、益々忠勇なる軍人を養成することの大切なるは勿論のことで、私も賛成でありますが、ドウか夫と同時に、其軍人を十分に働しむるのに差支のないやうに、國の財力を豐富にすることに心を用ゐなければなるまいと思ひます。就ては、玆にいろ／＼、外國と我が國との、富力上の御話をしなければなりませぬが、つまり其話は、腹の立つ樣な事ばかりでございますから、面白くはなくても、何卒怒らずに、又落膽せずに、御聽取あらんことを希望します。

凡ろ、貿易即ち、輸出入の共に盛なる國は、必ず之を富んだ國と視て間違はないものであります、貧弱なる國では、決して大きな貿易の出來るはづのものではない。ソコで、貿易の統計（去明治廿四年中に係るもの）を調べて見ますると、世界で貿易の最も發達して居る

のは、海軍と仝じく、第一番は則ち英國で、其總額は四十八億七千萬圓、二番が獨逸で、三十四億萬圓、三番が佛蘭西で、二十六億萬圓、四番が北米合衆國で、二十四億萬圓、五番が和蘭で、十三億萬圓、（是イヅレも當時の相場を以て換算した銀貨圓であります）然るに、我が國は、仝年に於て、一億三千八百五十四圓ある。是を國民の頭割にしますと如何なる比例をなすかといふに、英吉利人は、一人に就て百二十八圓餘になるのに、我が國人は僅々三圓四十二錢であります、又英吉利は、全躰の額では一番でも、人口が多いから、頭割にすると、是よりは尚比較的に多い國民がある、即ち、頭割にして一番に多いのは、和蘭人で、二百八十三圓餘、其次は瑞西人で、百五十圓餘、次が白耳義人で、百三十圓、英吉利人は、第四番であります、我が國も、其後は年々に増加して、二十七年度の如きは、二億三千萬圓に達しましたが、頭割では、まだ〳〵、五圓五十錢になりかねるのであります。

（以下次號）

女子の弱點

坂本三七郎

女子に最も尙ふ所のものは、情にありて、理にあらず。然れとも、其の弱點の由りて來る所を探れば、また、情の正邪如何によらずんばあらず、故に情の弱點弊害を來さざらんと欲せば、之を匡すに、理を以て勝たざるべからず、徒らに情の一に任せて之を行はば、嫉妬娟邪の事至らざるなきに至り、愛の心は正しき愛情にあらず、惡むの情も、正理に於て惡むの事にあらず、正邪相混し善惡相錯りて、一に一己の私情によりて、直徃徑行するに至らん。是、豈、吾人か常に論ずる所の、情の正しきものならんや。吾人は一二の例を擧けて、之を諸嬢に與へ、座右の戒となさんと欲す、而して此の例、男子と雖も免かるへからさるのこと、就中婦女子

の如き、情を專とするの者に於て、最も其の功にして益あるを知るなり、套話陳言なりとして之を捨てざれば則ち可なり。

昔、漢に第五倫と云ふ人あり、頗る清廉正直を以て知らる。或人之に問ふて曰く、子の如き人尙私情の去るべからざることありやと、五倫答て曰く、之有り。昔余に某官を求めんとして、千里の名馬を以て賄賂とせり、余之を退けて受けず、然れども後某官に欠員ある毎に駿馬を送りし當時を想起せずんはあらず。また、余兄の子病に寢ねたり、時に余、一夜に十たひ起きて其の病狀を問ふ、然れども室に返りて寢ぬれは、眠安然として心靜なり、後、余が子亦疾めり、一夕の間其の病を看ざれども、終夜心安からずして眠る能はざりし。之に由て、余の未私情に勝つこと能はざるを戒めたりと。

第五倫は世の稱して公正なる人なり、然れども尙、其の私情の去るべからざること此の如し、況や、普常の男子おや、又情に專なる女性に於てをや、情既に彼に專一なれば、此に於ては淡なる水の如く、情波の激動して上下左右する、婦女子より甚しきはあらず、若し此の中に於て、一點理に由て之を抑壓指導するなければ、其の極の弊は底止するを知らざるべし、情の一點より賴むべきはなく、また、情の一點より懼るへきはなく、何ぞ吾人が詳說を要せん、世上女子社界の有樣を諦視せよ、敎育なきの婦女が、身を破り行を損ずるは一に情の弊に在り、此等の婦女、或は恕すべきも、相當の敎育ある女流が、尙失行亂行あるは、是また情に基せずんばあらず。吾人は獨り、愛情、癡情、惡情の如き點を論ずるにあらず、婦となりて舅、姑、夫、に事ふる、或は婦女子が、其の同流と交際する子を養ひ、奴婢を使ふ、其の事の圓滿を欠き交を絕ち、相和せざるは、皆、其の源を探らば、情の弊に生じて、理を以

て情を正道に誘はさればなり。吾人は常に世の婦女子を見る毎に、情の厚きを稱して、其の情の常に邪蹊に曲行せざらんことを冀ふ。

更に情の激動して、正當を得ざるに就て例證あり。孔丘曾て謂ふあり、之を愛して其の生きんことを欲し、之を惡みて其の死なんことを欲するは惑ひなりと論せり。情の表裏反覆を説く、實に切なりと云ふべし、朝に手を握りて厚情渝らすと盟ひ、一旦相反目するに及んでは。彼の死を欲し、彼の不幸を冀ひ、甚しきは彼を陷れて、其の悲叫を見、手を打て笑はんとするは、世の男子に於ても、往々見る所なりと雖、女性に於て此の情最も甚しかるべし。讀者諸孃、乞ふ之の語を世の婦女子に徴し、更に之を自巳の心事に鑑みて、必思ひ半に過ぐるの敎戒を示さん。

讀者諸孃ば、皆是十分の敎育あるもの、吾人の說、固より釋迦に對して經を講するに似たり。然れども、吾人をして此の說を爲さしむるものは、思ふに、今の婦女子社會は、敎育を受け道理を解する者に、却て情の弊に陷るもの多し。啻に多きのみならず、敎育あるものゝ情弊は、之を一身に止めずして、更に世の善良溫和の諸孃を拉し來りて、誘て情弊に汙染せんとす。是か爲に女子敎育の論、彼此相起りて、心あるものゝ大に憂ふる所なりとす、女子の弱點、之を救ふは、一に理に依て匡すにあり。讀者諸孃十分の正情を養ひ、而して一理の指導其の方向を誤らざれば、情は多々益々多からんことを欲す。女子の天地は情の世界なればなり、諸孃以て如何となすや。

女子の從順は優劣競爭の結果にあらず

林 孚卿

凡、道德と名つくるものは、智識と、意志との力によ

りて、其の地位に於いて負ふところの本分を盡さんことの謂に外ならざるなり。君としては、かならず、仁政を行はざるべからず、臣としては、かならず、忠節を盡さざるべからず、父子の孝慈におけるも、夫婦の貞愛におけるも、また、必、缺かせざるべからざる性質を先天に稟け、おのずからなる羈束を受けて然るものにはあらざるなり。若、人にして、君にして仁ならず、臣にして忠ならず、乃至、父にして慈ならず、子にして孝ならずむ、一日も、その生命、その位地を保つこと能はざるがために、いはゆる適者生存の上よりして、自然に、道徳性を發養したるものにして、君となりては、仁を行ひ、臣としては、何人も、忠を盡し、父子、夫婦の道におけるも、また、世間何人も、孝慈、貞愛を致すべきものとなさんには、道徳は、人性を羈制する先天の約束にして、その行ひなる、決して、かならずしも、貴重すべきものにあらずとせざるべからざるに至らん。畢竟、人の性は、善にも、惡にも、自由に、取捨することを得るものなれども、智識と、意志との力によりて、邪念をおさへ、善良に就くものにして、その横逸をゆるさず、私慾の趨るをほしいまゝにせしめざる意志と、智識との力に發するゆゑにこそ、道徳の貴重なること、かくの如きを致せる所以なれ。

女子の、男子に從順なるを以て、その道徳となすこと、また、この理を沒るべからず。女子は、その天授において、體質、心性、ともに男子に劣るがゆゑに、男子に從順ならざるべからずといふが如きものなけんには、若、女子にして、その體質、その心性の、たま〳〵、男子に勝るもの生じたらんには、かくの如き女子は、男子に對して、從順なるべき責務なしといふに至らん。吾人思へらく、女子の、從順を德とするは、その天稟において、男子に劣るがゆゑにはあらざるなりと。畢竟、陽は、健に、坤に順ふ社會の整齊上、進歩、およ

び、平和の必要よりして生じたる絶大至高の道義にして、優劣競爭の結果より出でたる禽獸的の結果にあらざるなり。

人文の、いよ〳〵進み行くにつれて、智育、および、體育に於いても、將來、女子の、ます〳〵、勢力を得るに至るべきは、自然の勢なり。（今日に比較して）しかるに、女子の體質、心性の、かくの如く、進歩するによりて、女子が、向後、男子に從順なるべき責務の、次第に消え行くべきが如くに心得、從來の道德的の從順をもて、腕力の屈服なるかの如くに誤想し、復讐的に、權理論を唱ふるが如きことあらば、その女人は、自家の地位を高めんとして、かへりて、馨しき道德の美華を、われから萎むるものに外ならざるべし。

また、その、かくの如きを見て、女子の高等教育に、杞憂をいだく男子も、また、はなはだ、謂なしといふべきのみ。

女子教育一斑（十八）

三輪田眞佐子

かく、校風を盛ならしむるは必要なれど、誤りて生徒を壓制、あるは、徒らに束縛するはあしゝ。元來道德は、自得するにあらざれば、決して永續するものにはあらじ。然るに、壓抑になるゝものは、一時の責任を免れんとのみつとめ、將た、束縛せられ居るものは、氣隨の機會もがなと待つをもて、一朝自由の身となれば、忽ち放恣を極むる例あり、故に、壓制及び束縛は、德育上幾分の効力はあらむも、決してこれがため大なる進歩はなきものぞかし。唯しらず〳〵校風に感染して、自ら道德の眞味を甞め、必要を悟りてこそ、德育の目的は達するなれ。

なほ、女子の德育上研究すべきことは、女生の寄宿舍なり。凡そ寄宿舍は、男子の學校ならんには、學生の氣力を練り、以て公義の心などを養ふに必要ならむも、

女子の寄宿舍は、女德を修め得るに適するやうせんにはあらで、頗る困難なる事情あるを以て、多くは、世人を滿足せしむること、彼の男子の寄宿舍に於ける如くならざるは、人皆の知るところなり。

今、通例女生の寄宿舍につき、その弊害の一二を述べんに、先づ不始末の習慣に流るゝめり。こは男子なりせば、さまで影響なからんも、女子は家政を主るものなれば、幼より始末を能くすべきものなるに、通例の寄宿舍にあるときは、汚れたる衣は、洗濯屋來りてこを淸め、食事も終らば、賄方走りてこれを收め、あるは、掃除も、辛うしてその室を調へば止むものから、自然、婦女のつとめを厭ふ傾きを生ずらむ。

次には、寄宿舍になれし女子は、わが國風の家族的生活をなすに適せず。實は、寄宿舍に居るときは、種々の氣質なる人と相交るを以て、つね〳〵互の意中に憶測するのみならず、專ら義理のみをいひて、人に接するになるゝを以て、一朝恩愛を尊び、しかも心に隈なう互に肺肝をはくべき家族的の生活をなすに當りては、舅姑の命令にもとるは更なり、良人に心を委ぬる能はざる如きこともあらん。世人の多く女學生を嫌ふ所以は、この點にこそ。

その次は、虛飾の風を覺ゆるめり。その由來は、女子の特性にや、恥辱心強きを以て、その身のほど〳〵を忘れ、つとめて美服を裝ひ、あるは、その位地の高きを知らしめばやと思ふらん、故ら實際庖厨のつとめなどは知るを恥ぢて、反りてかゝることは、手にもふれしことなきなどほのめかすものありとかや、されば、おのづから、虛飾の心を高むるに至るべし。

その他、惡習に染み易し。まことや、處女、たらちねの親の膝下にあらむには、野卑なる言語動作は決してなさざれど、一旦父母を遠ざかり、兄弟と離るれば、さながら、籠に養はれし鳥の、自由となりし心地して、自

ら飲食をもとめ、裝飾を買ひなど、一般の風潮にいざなされ、始めは心ならずなせしことも、遂には進みてなすやう變化するなるべし、あるは、薄情の風を見、あるは、猜忌の心つよき人と結びて事をなすより、冷澹なる人となるべし。

されど、女子の寄宿舍なるものは、設くる必要なきか。あり。そも〳〵、花の蕾にもなぞらふべきたをやめの、住みなれし故郷の山川をすて、遙々都會に出つるものとも、幸にこをはぐゝむ知人、あるは、親戚あらむには妨なからむ、なれど、かくたよるべき人なきものは、如何にすべき、これ寄宿舍を必要とする理由なり。あるは、師範學校女子部の如き、一定の規律に從はしむる必要あるものは、是非寄宿舍なかるべけんや。あはれ例の寄宿舍は、弊舍多きものに拘らず、ろを設くることの止むべからざる理由、かく大なりとせんには、如何すべきか、こは良法を撰ぶべきなり。況してれの思ふに、寄宿舍に於て良法を行ひ得る曉には、ろの校風を實行し得て以て、好人物を作り得るのみならず、相互に智能を交換し、あるは、研學の便利を得、あるは、處世の心得さへ得るなるべし、されど、如何なる寄宿舍を設くべきか、今ろの制度を定むること肝要なれ。



史談

丹波の孝女

壚井ふく子

至誠よく天地を動かし、鬼神を感せしむといひけむ。丹波の國と、丹後の國との界に、毘沙門山と稱する處

あり。むかし、この麓の村にいと貧しき農夫ありけり。その家に、二人の娘ありけるが、姉は先妻の子にて、十七歳に、妹は十歳にぞなりける。その父は、姉が十歳のをり、身まかりにけり。此の親子賤しきものには似ず、母なるものもまゝしき心なく、姉妹かはる事なく、いつくしめど、姉娘もまた心すなほに生ひ立ちて、母に妹によく心の誠をつくし、妹もまた之にならひて、よろづにやさしくかしづきて、親子、姉妹、誠にむつましく、一尺の布も共にをり、一斗の米も共につきて、むつびあひにけり。かくて、母は年老ひて、産業も出來ざるに、姉は日々山野に行きて薪をこり、あるは人に雇はれて、僅の代を得、糧となるべきものを、あがなひ歸りて、母に供し。妹は日毎に市に出でゝ、菓物を商ひ、姉をたすけて、二人ひとしく心を合せ、母を安く養はんとすれど、かよわき姉妹のうでの思ふやうならず、ともすれば食の乏しき事のあるに、姉妹はあるかぎり骨身をくだきて、はたらかんとすれど、なほ十分に母をば、はぐゝむ事のならぬを、二人はいとなげきけり。あるとき、二人つれだちたる道すがら、人なき處にて姉なる方、ひそかに妹に向ひて云ひけるやう、せめて御恩の萬一なりとも、母上にむくひ奉らんと思へど、日々の衣食をさへ充たす事の叶はぬことの淺ましさ。とてもかよわき力にて、かゝる山中にありては、思ふやうならず。おのれ人にきくに、都には人あき人のありとか。そを尋ねて此身をうり、その身の代を以て、母を養ひまゐらせたく思ふなり。御身は歳まだいとけなければ、孝情は姉にもまさりたり。おのれあらぬ後は、くるしかるべけれど、暫時の間、ひとり母御をば大切にやしなひまゐらしてよとて、涙ながらに語りけるに、妹はかなしさに、答をもなせず。たゞ泣き沈みたり。姉はなほいたはりなぐさめ、此の事御身にももらさず、ひとりにはかにと思ひたれど、さ

りては中〳〵に、うらみやせんと思ひて、かく語りれ

くなり、ゆめ母上にな知らせそ。返す〴〵もぞとて、諸共に衣の袖しぼりつゝ、さて家に歸りぬ。その日より、暮れぬれど、夜毎に妹の見えざるに、姉はいぶかり、妹が行方を母なる人に尋ねけるに、山の毘沙門堂へ心願ありとて、詣でたりと云ふに、姉はいと殊勝に思ひ居けり。折りふし雨いたく降る夜、妹の例の如く行かんとするに、今宵は雨ふりて道もくらく、小坂のけはしきを、幼き足にふみあやまりもせで、母の心をいたむる事は幾ぞくならん。夜あけて雨の晴るゝを待ちて詣でよ、今宵はとゞまりねと、姉のとゞむるに、御諫めはさる事なれど、妾、母の事、姉妹の事、ねがひまゐらせて、今宵はたま〳〵七日の滿願、いかで神を僞り申さるべき。雨ふるも、くらくも、日來なれたる道、たどりはあやまつまじ、まげてゆるし給ひて、御心安うをられてよと云ふを、姉はなほをしとゞめ、

是非に行かんとなら[illegible]

宵は行かん。代りたりとてもとより姉妹、神も同じにきこしめされんと云ふを。いなとよ、已れが天王に願ひしなり。人を遣はしては、たとひ姉妹なりとて、何かはせん。心安う思召せ、決してけがなどはなし侍らじ。此事母上にさとられ給はぬやうなし給ひてよとて、ひきとむる袂をふりはらひ、思ひつめし心の一すぢに、大雨もいとはず、夜半のほどに、一里ばかりの山坂をすべりつ、こけつ、やう〳〵に峠の堂へ出で行きけるが、からうじて、其處にたどりつきて、いのらんとするに、堂の中赫々として火かげのかゞやきけれど、いといぶかしく、内をうかゞふに、二人の賊ども雨にぬれたる衣を、ほして居たるなりけり。少女は賊とは知らず、こは、旅人の雨やどりするならんと思ひ、そと内に入れど、賊は物音にうち驚きつゝ、きつと外の方を見るに、十歳はかりの乙女、ひとり蓑笠かつぎて來

りければ、此の雨夜のくらきに、たゞひとり此處へ來るは、つれにはくれしにやととへば、つれはなしと答ふ。また何處へ行くとて此處には來しぞといふに、此の御堂の本尊に願ふ事ありて、しかも今宵は滿願なれば、詣でつるなりとて。進み入りてしばし拜禮してゐるを、かの賊はうち見つゝ、ふもとの村よりはるぐくと幼きものゝ足に、如何なる祈願ありて詣でたる。語れと云はれて、少女は恥ぢていらへず、つい居たりしが、しひて尋ねられ、なく／＼答ふるやう、妾一人の母を、姉と二人して養ひまゐらすれども、かよわきうでに心屆かず、父は過ぎし年みまかりて、其頃田畝とも悉く賣り拂ひて、今はなく、その日を過ぐさんよすがのなきに、姉は京へ身をうりて、その代をもて、母を養はんといへば、姉ありてだにくるしきを、姉なくて己れひとりに母をばはぐゝまるべき。されば母をば足らしめんほどになし、姉をも身をうらせずして此のまゝに、母子もろともに居りてんと思へど、如何にも力叶はず、はては神佛の力をたのまんより外に便りもあらじと思ひ侍りて、此の堂の本尊に七日參りの願をかけ、此事叶はずば、姉にわかれ、母をうゑさせ、ありて甲斐なき不孝者、早う命をめされ給へと祈り申すなりとて、さめ／＼となきけるに、石流の賊も互に顔をば見合せ、涙を拂ひつゝ、さても世にはやさしき子もありけるよ。よくも母を大切にれもい、姉をも大事にはしつるぞとて、二人何をかさゝやきて、盜みとりたる金銀に衣服をそへ、風呂敷につゝみ、乙女にあたへて、今よりなほ母に厚く孝養をつくすべし。われらは旅の商人なり。用意の金銀、思ひ感ずるのあまりに參らするなりとて、與へけるに、少女はいなみて受けざるを、さて／＼正直なる人かな。されば之は己れのとらするにはあらず、御堂の神のとらするなれば、いなまで持ち行きねと云はれ、流石に童心うれしう

思ひて、あつく禮して、歸りけるに、二人はなほ蓑笠をきせあたへなどしけるに、童女は盗賊としらねど、なほあつく幾度か禮をのべて歸りたりとぞ。如何に惡人なりとも、性は善なり。至孝至誠には感ずる事、げに此の如きものあり。神の利益など云ふも、大方は己れの心の至誠の己れに感ずるのみの事のみ。さるにても、かゝる山中の教へなき賤しき童兒にも、なほかくの如くに母を思ふ子あり。あはれ世の道をきくの人たち。これにかへりみてよ。

松前の貞女

故人　屋代弘賢

寛政の末の比、若狹國の人、松前にゆかんとて、敦賀より船に乘りたり。そのふねの内に、さだ過ぎたる女一人あり。いづくよりいづくへゆくにかと問ひたれど、京より箱館のしらとりに歸るなりとこたふ。いかなるゆかりにて、京に在りしかどと[illegible]もあらず、みづからは、ふるさとに在りし時、人につれそひしかど、ゆゑありてわかれ、やもめとなりぬ。れやはふたゝび人にみえよといはれしかど、かたくいなみてのがれたり。みやこの見まくほりせしかど、ひとのまうのぼりとて、船にて能登國につきぬ。さて京にいりてあき人の家より、つふねとなりて、一とせ侍りしかど、れもふはとは都の手ぶりもしられざりしかど、高倉さまに參りて、二とせつとめ、さて故郷にかへり侍るなりといふ。それがつくりしからうたとて、その人うつし傳へたり。

春盡早回一葉船。　薰風拂レ浪向二胡天一。
誰憐去程三千里。　旅恨悠々碧游煙。

又その國のことゞにてよめるうた、

春くれどちようかい心ひるかして
霞のうちにちつふみねけり

チヨウカイは巳、ヒルカシテは悦意。チツフは、小舟をいふ。

あぶらさけやくさけまでもいしやませむ
ひるかてつひもなに、かはせん

アブラサケは美酒、ヤクサケは、ねどのにごりさけ、イシヤマセバ、無といふこと、ヒルカは嬉しきといふこと、テツヒは肴といふこと、いふ。



活花（十八）

芍薬

田邊和氣子

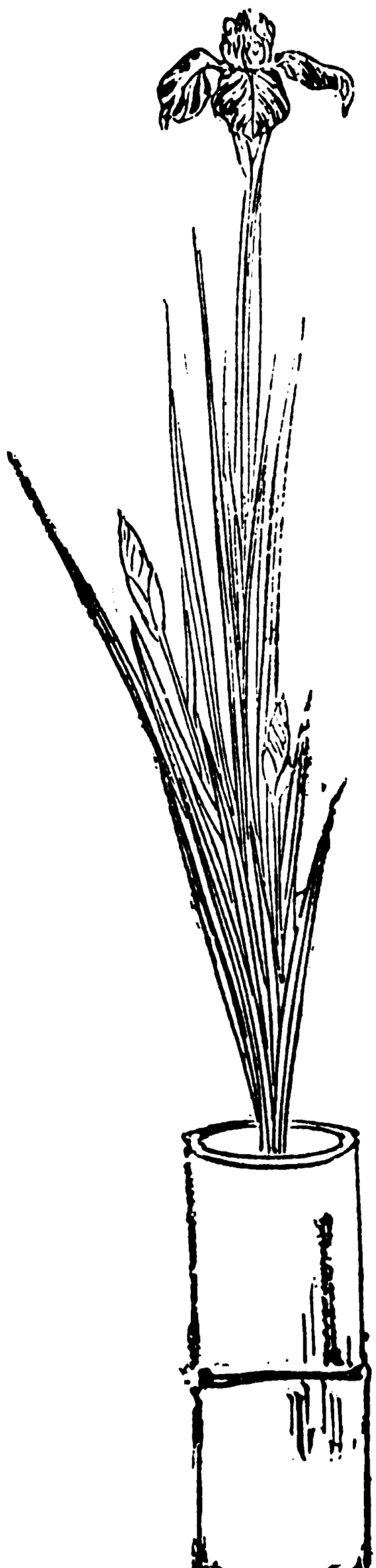
芍薬は花重くして、活やすからず、故に可成つぼみを用ゆべし、眞副体の寸尺は例の如し。葉多く茂りたる所は、見恰好よく切とり、花は五本斗り活べし。花瓶



大ならど、七本活るもよし、真副体の寸尺を定めて、よき程に切り、根を火にて焼べし。焼たる後はしめし水につけ置をよしとす。

菖蒲

菖蒲は杜若に同じき法なり。体の前なる葉三枚の組合せ方は、中を高くすべし。菖蒲は其性質丈け高きものなれど、充分直にして、高く活るをよしとす。葉の裏表を見合こと杜若に同じ。これも花瓶の大小により、五本七本活るをよしとすれども、何気なく見ゆるものながら中々手ぎはむしけれど、見ぐるしくなるものなり、故に先づ三本又は五本活習ふべし。



たちぬひ

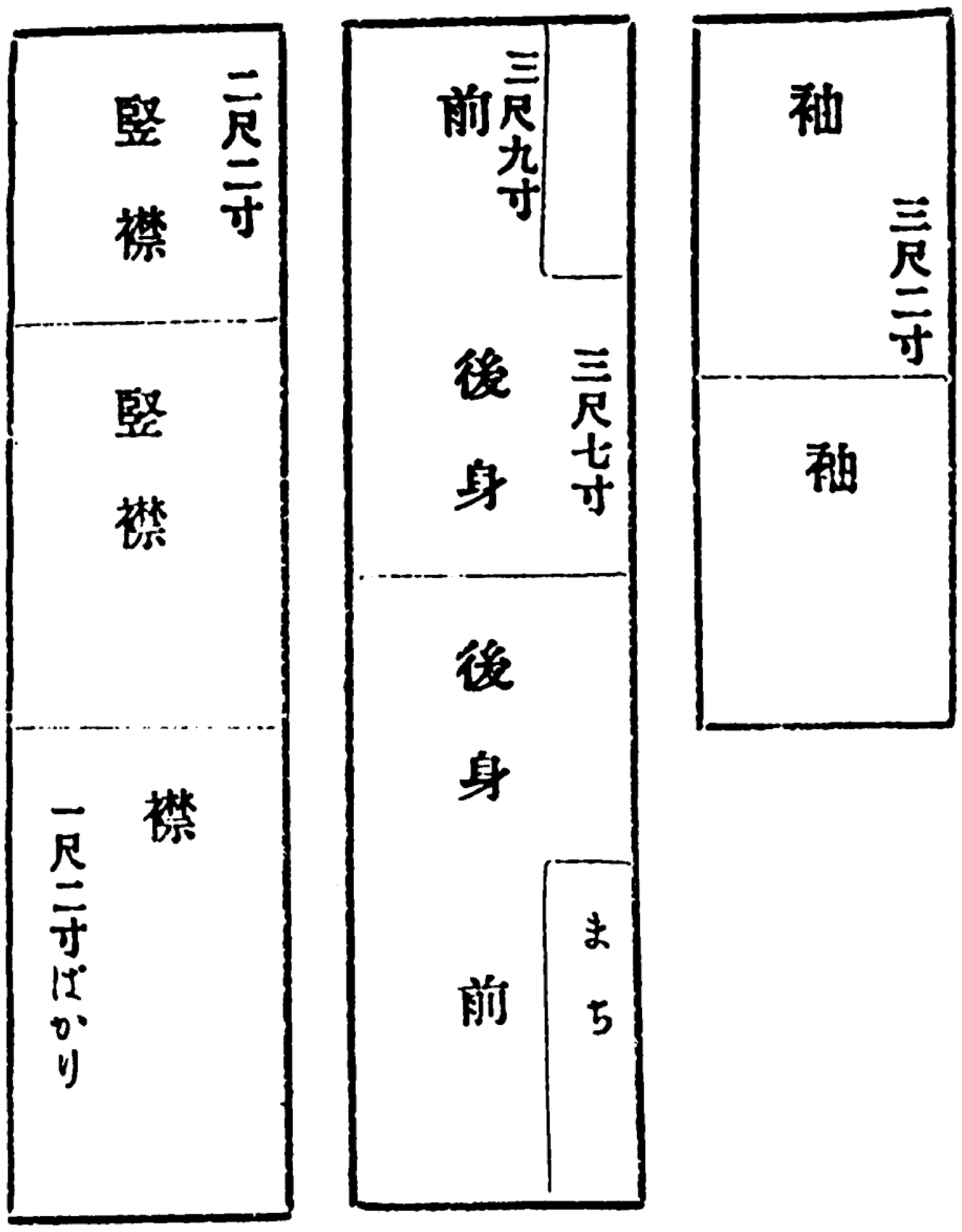
西山たい子

（卅五）被布の裁ち方

まづ両袖をとり、ぬひ上りの丈け何尺に、前下り何寸を加へたるものより、襟かたよりの下りたけをひき去りたるもの丶、二つぶりをとりて、竪襟とし、残りを

羽織の如くに、前の方を下りたけ長くなして、四つにをり、身衣となし例の如くにして、。。。。ゑりかたをあけ、それより眞直に前の方をかきて、そのかきたるものを、袖口と襠とになすべし。また、うしろ襟は天鵞絨にてもつけるべし。もし同じ切にてとらんと思はゞ、身衣を裁つ前にとりおくべし。

被布裁方の圖

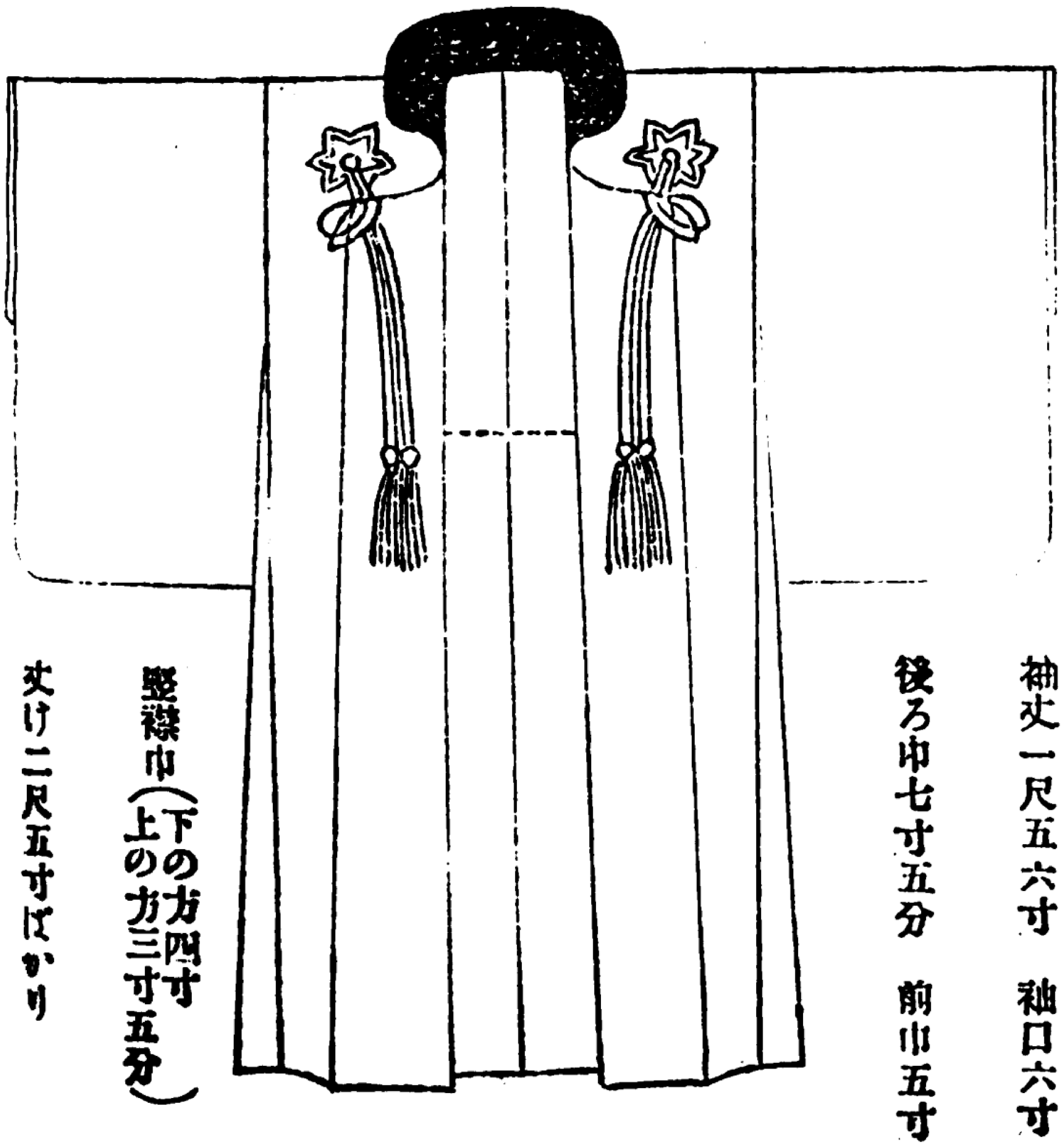


但し、袖丈、身丈等は、年と人とに應じてたつべし。

（卅六）その縫ひ方

まづ、四袖をぬひおき、背をぬひ、羽織の如くに、前下りをして、表と裏とをあはせ、襠をつけ、竪襟をも表の方にぬひつけおき、うしろ襟をも裏の方へぬひつけ、四袖をつけて、綿を入れ、ひきかへして絎けあげ、

被布縫ひ上り圖



位置を見て装束を付けるべし、寸尺は、年と、其の人の大小に應じて定むべし。

だいどころ

○器物を取扱ふには、總て、手柔にして、其破損を爲さゞる樣注意すべし。手措よく使込たる器物の、而かも清潔なるは、例へ、品よろしきものにあらずとも、心地よきものなり、されども、貴き器に、手措の疎略なる跡見ゆるは、厭ふべきものにてこそ。

○勝手元に用ゆる器物は、堅牢を主とすべきこと勿論なれども、客に出すべきものは、稍〻、体裁にも意を用ゆるを要す。但し、体裁に注意するとて、經濟にかなはぬはわろし。

○客に出す器の貴き品なるは、固よりよきも、之無けれど、普通の品を用ふべし、所謂、輸出品杯の、いときらびやかなる廉價物を使ふは卑げに見ゆるなり。

○客不意に來りて、酒食をすゝむるに當り、狼狽して、勝手元の騒々敷はいとき丶ぐるし。調理品の無きときは、無きに任せて、順序よく、心しづかに調理すべし、只管急ぎて、心しづかにせざれば、手早くは出來ぬものなり。

○酒の燗を爲さんには、德利の中をよく洗ひ、水の殘らざる樣にして後、酒を注ぎ込み、沸騰たざる湯の中に入るべし。よく洗はざる德利にて燗し、又は熱湯にて燗するときは、酒の味を損することはなはだし。

○燗の加減は、人々の好同じからず、又た、時候と場合によりて、同人にても、其好を異にすることあれども、酒の眞味は、微温に在と聞けり。

○錫の器を用ひたるときは、洗て乾しおくべし、水つきて乾ざる部分あるときは、忽ち銹を生ずべし。

○裏漉を用ゆるときは、之に張たる粗布の目を斜に擦る様にすべし。直に擦るときは、布の目、一所に寄るおそれあり。

○陶器の汚たるを去るには、曹達水、又は、灰の汁に之を入れて煎るべし、よくおちるなり。

○塗物の縁の剝落たる、陶器の欠損じたる、又は、箸の木地汚れ垢つきたる杯は、客の前に出さぬ様注意すべし。只氣味あしきのみならず、無禮になるなり。

○庖刀は、すべて、使用たる後には、布巾にて拭ひおくをよろしとす。

○銅の鍋の「ハンダ」おちたるときは、更らに之に「ハンダ」を敷かしむべし、「ハンダ」落ちたる鍋にて、煮ものするときは、緑青いずるゆゑ、毒ありと知るべし。

梅干の漬方

青梅を取るは、入梅後を季節とす、扨て、之を梅干に漬ける方法は、取りたる梅子を、一夜程水に浸し、笊に揚て水氣を去り、梅壹斗に、鹽五升の割合にて、鹽漬となし置き、夏の土用となりたるとき、之を出して、竹簀の上にひろげ、三晝夜程、庭などの屋根なき所に干し、其赤色になりたるとき樽に詰め、目張を為しおくときは出來るなり、又た青梅を漬たる後、紫蘇の茂るを待ち、其の末んを摘み、よくもみて前に漬たる青梅の間に入れ置くも宜し。斯くするときは、梅の色、紅くきれいになるなり。



日本文典（十一）

鹽井正男

變格動詞の語尾の變化するさま、即ち、活くさまには、前回の末にあげたる加行變格と左行變格と稱するものの外に、なほ、奈行變格、良行變格と稱する二種あり。

（三） 奈行變格

この變格に屬せる動詞は、唯「往ぬ」、「死ぬ」といふ二個の詞のみにて、其の語尾の變化するさまを見るに、

往な、いに、いぬ、いぬる、いぬれ
死な、しに、しぬ、しぬる、しぬれ

といふやうに活きて、な、に、ぬ、ね、と四段に活くさまは、正格の動詞の四段の活用に似たる所あれど、更に「ぬる」「ぬれ」といふやうに活く事は、それと異れる所なり。また、に、ぬ、ぬる、ぬれと活く所は、正格の動詞の上二段の活用に似たる所あれど、なほ、「ね」とも變化し、また「な」とも活く所は、それと大に異る所なり。故に、變格と爲すなり。

（四） 良行變格

此の變格は、

在ら　あり　ある　あれ

といふやうに活きて、ら、り、る、れと變化するさまは、正格の四段活用の良行の詞に似たれど、それとは、全じからざる所あり。例へば、正格の四段活用言の良行の散るといふ語を取り出し見るに、

散ら　ちり　ちる　ちれ

といふやうに活けど、ら、り、る、れ、と變化する所は似たれど、四段言は、例へば、「花が散る」といふやうに、散るといふ所にて、斷定をいひあらはす事を得、即ち言葉を終止するを得れど、此の良行變格は、例へば、「鳥が在り」といふやうにいひて、在りといふ所にて、斷定をいひあらはすやうなる。四段言にては、第三段の「る」音の所にていひあらはす所を、此の良行變格にては、第二段の「り」音の所にて爲すやうなる。これ異る所なり。なほ次々にいふ所にて、詳しく知り玉

ふよしあらむ。
動詞の語尾の變化するありさま、即ち、活用するありさまは、ひきつゞき述べ來れる如き九種あるなり。これより、その語尾の變化するにつけて、それ〳〵異りたる節あることにつきて申さむ。それは、やがて、動詞の格といふ事なり。

動詞の格

例をあげて說きあかさんが、わかりやすからんゆゑに、いま、「學ぶ」といふ動詞を取り出でゝ申さむ。
此の「學ぶ」といふ詞は、

學ば、學び、學ぶ、學べ、

といふやうに、四段に語尾の變化活用する詞なるが、斯く語尾の變ずるに從ひて、それ〳〵異りたる節ありて、「學ば」には、「む」或は「ん」といふ語を置く時は、いまだ來ぬ事或は將に然らむとする事をいふやうなる。例へば、

道を學ばむ賢人とならむ。
世にあらむ限りは學ばむ。

などにて知るべし。また、「學び」となる時は、名詞と成り、或は、他の動詞に添へるを得、例へば

國の學びを、むねとすべし。
學び勵みて、賢き人となれ。

などいふにて知るべし。また、「學ぶ」となる時は、名詞或は代名詞などの上に連ねて、其の事物を形容するやうなる時に用ひ、または、事物を斷定する時に用ふ。例へば、

世には、誠の道をまなぶ人まれなり。
われは文學を學ぶ。

などいふにて知るべし。また「まなべ」となる時は、「學べば知る」といふやうに現に然ある事をいひ、また、「まことの人となるべき道を學べ」などいふやうに、命令する時などに用ふ。斯の如く、語尾の變ずるにつけ

て、それ〴〵異りたる節あるなり。これを動詞の格といふなり。其の節は、まづ、六段あり。即ち、動詞の格に六段を分つなり。

一、　將然の格

これは、例へば、

上野の花さかば、行きて見む。

明日は五時に起きむ。友を誘はむ。上野に行かむ。花を見む。

などいふ時の「さか」「見」「起き」「誘は」「行か」の如き詞にて、「ば」或は「ん」といふ語をつけて、いまだ來らざる事物動作、或は將に然らむとする事物動作をあらはす格なり。

二、　連用の格

これは、動詞か、他の動詞、或は形容詞、或は助動詞につゞく時の格にて、例へば、動詞につゞきたる例は

花さきにほふ。　鳥とびうたふ。

山路を越えわづらふ。人は老いゆく。

書を見終る　土を蹴散らす

の如く、また助動詞につゞくは、例へば、

風ふきぬ　花散りたり

月落ちつ。　教へをうけて

雨晴れけり　白衣着たり

などいふ如く、又、形容詞につゞくありさまは、

きゝ苦し　讀みよし

見ぐるし　越え難し

などいふ如し。

三、　終止の格

これは、或は斷言切斷ともいひて、例へば、

花さく　鶯うたふ

月落つ　鳥鳴く

などいふ時のさく、うたふ、落つ、鳴くの如く、詞のきれ目となり、一段落となりて下につゞかざる時の格

なり。

四、連體の格

これは、連名とも稱して、動詞が、名詞或は代名詞などの體言の上に來りて、形容詞の如くなる時の格なり例へば

　咲く花、　花見る彼れ

などいふ時の「咲く」「見る」の如き類なり。これは文章和歌の上にも、また口語の上にも、よく其の下に來るべき名詞代名詞を略きて、單に

　行くは誰がつま　讀むは何の書
　落つるは露か涙か。

などやうにいふ事あり。此の「行く」の下には、人とか者とかいへる名詞をはぶきたるにて「讀む」の下には、書とか、物とかこれとかいへる名詞代名詞をはぶき、「落つる」の下には、ものとなしづくとかいふ名詞をはぶきたるなり。など、ものなどいふ詞をはぶく事、殊に多し。

五、已然の格

これは、既に然れるをいふ格にて、例へば

　秋の露、玉にぬかむと、取れば消ぬ。
　　よし見む人は枝ながら見よ。
　近江の海夕波千鳥ながなけば
　　心もしぬにいにしへおもほゆ。
　年ふれば齡は老いぬしかはあれど
　　花をし見ればもの思ひもなし。
　木の間よりもりくる月の影見れば
　　心づくしの秋は來にけり

などいふ時の「取れ」「鳴け」「ふれ」「見れ」などいふ如きものにて、これは必ず「ば」といふ語を添へて、初めて其の格を爲すを得るなり。

漫録

根わけの後の母子草

瀧澤馬琴

文政四年辛巳の春、二月晦日の黄昏ごろ。元飯田町の中坂に、ゆきたふれたるをうなありとて、これを觀るもの堵の如し、この日、自身番屋につどひゐたる當番の町役人等、定番人を遣して、その體たらくを見せけるに、旅行ものとおぼしくて、無下に老皺ひたるが、長途に疲れ、足痛みて、一歩も運ばしがたしといふなり。これによりて、町かゝへのものに脊負して、やがて、番屋に扶け入れつゝ、事のやうを尋ぬるれど、答へていはく。婆々は、奧州白川の城下、中の町なる、宮大

五十歳が後家にして、名をしげと呼ばるゝもの。今茲は七十一歳になりぬ。良人十藏が世を去りて後、十三ケ年已前、文化六年の春、わが子源藏といふもの、逐電して、ゆくへもしらせず、人傳に聞けど、江戸にありといひにき。家にはなき人の、前妻の子どもはあれど、勇魚取うみにあらねど孝ならず、日毎の口舌いぶせければ、世にある甲斐もなき身なり、いかで、わが子の在處をたづねて、あはづやと思ひさだめしは、九ケ年已前の事なりき。かくて、文化十年の春のころ、みちのくよりあくがれ來て、江戸に留まること半年ばかり、四里四方の外、近郷まで、月毎日毎にたづねしかども、夢にだもあふよしのなければ、さては、江戸にはあらざるならんと、やうやくに思ひかへして、いよいよ廻國の志念を堅うし、東山、西國いへばさらなり、南海、北陸おちもなく、凡六十六ケ國の、靈山靈地を巡禮して、過去には、なき人の菩提の爲、現在に

は、命のうちに、わが子に逢りあはしめ給へと、念ずる外にわざもなく、乞食してゆく旅なれど、人の情にあふ日は稀にて、露に宿り風に梳り、あるときは、あら磯のなみ風に吹きすさまれて、其終夜夢もむすばず、又或ときは、深山路の雪に降りとぢられて、つく竹杖の節も屆かず、百折千挫の艱苦を歷たれど、是までは、一とたびも病みわづらひしことはなく、旅ねすること九年に及べり。今は既に巡り盡して、廻國すべきかたもなけれど、ふたゝび、江戸をこゝろざして、岐岨路をくだり、甲斐が峯をうち逢り、よんべは、兩鄉の渡りとかいふ、川邊のあなたなる里に宿とりつ、さて、けふ、江戸に來つるなり。かゝりし程に、あの御坂のほとりにて、俄に足の痛み出でて、一步も運びしがたけれど、思はず倒れ侍りきといふ。

按ずるに、ふたこの渡りは、江戸を距ること、西のかた四里許にあり、この地は、甲州街道にあらず、大山道なり、かゝれど、甲斐より相摸路を巡りて、江戸へ來つるなるべし。

町役人等よしを聞きて。心地はいかにとたづぬるに、足の疾るのみにして、こゝちはつねにかはらずと答ふ。江戸にしる人ありやと問へど、いな知る人とては侍らざれど、八丁堀なる松平越中守さまは國屋敷にてたはしますなり、（さとび言に。領主を國屋敷と唱ふ）故鄉のかしこへ送らせ給へといふ。これにより、先、その腰につけたりし、風爐敷包を解かして見るに、九ヶ年巳前、ふる里をたち出づるとき、十藏、しげ等が菩提所なる、何がし寺（寺の名は忘れたり）より、書きてわたへし通り、手形とかいふ證文一通あり、濕風、塵埃に汚れけん、紙中は茶をもて染めたる如く、いとふるびたりけれども、その印章は、疑ふべくもあらず、この他錢八百文と、布の蔽褸のみありけり、そのいふよしと、寺手形と、既に吻合するをもて、番屋の奧の間に臥さしめて、藥をあたへ、且つ、夕餉

をたべさせなどする程に、日は暮れて、酉の初刻も過ぎたるころ、武家の中間とおぼしき男、自身番面におとなひて。やつかれは、嚮に主用の使にたちて、こゝの中坂を過りしとき、ゆきたふれたる老女を見たり、こころにかゝるよしもあれど、つばらに問はまはしかりしかど、火急の使なるをもて、時の後れんことををしくて、思ひながらに打ちすぎにき、今ろのかへるさなるにより、中坂にて人に問ひしに、番屋へ扶け入られてこゝにありとぞ、いはれたる、ろのれうなを見せ給へといふ、このとき、しげはまどろみたるを、町役人等呼び覺して。そなたのゆかりの人にやあらん、見まはしとて、只今來にたり、たいめんせよかしといふ程に、しげは、忽ち起き直りて、そは、わが子源臧ならずや、やよ、そなたは源臧か、源臧にあらずやと、せはしく問ひつゝ、跛よるを。町役人等推しとゞめて、さのみせきては事もわからず、心をしづめて問へといふ。そのとき件の中間は、ともし火をさし向けて、とさまかうさま、うち見つゝ、わが母に似たれども、年あまた經し事なるに、いたく老衰したるをもて、定かにはいひがたしといふ、町役人等これを聞きて、しかりとも、渠みづから、奥州白川中の町宮大工十臧が後家、名はしげと告げたりし、ことの由の分明なるに、をさなき時に別れても、親の名までを忘れはせじ、忘れやしつると、詰められて。さん候、その名に違ひなけれども、世には又、同名異人のなきにしも候はず、又いつはりて、利をはかるものしもなしとすべからず、身につけたりしそが中に、證據となるべき物などの候はずやと問ひかへされて、町役人等諾なひつゝ、かの寺手形をひらきて見すれど、見つゝ小膝をはたと打ちて。わろくも疑ひつるものかな、わが母に相違候はずといふを、しげは聞きあへず。しからば、そなたは源臧か。源臧にこそ候なれと、名のれど、しげは跛まつはりて、抱き

つきつゝ涙ぐみ。やよ、源藏よ、和郎に逢ひたい〳〵と、思ふばかりに、九ヶ年このかた、日本國中うち巡り、いくそばくその艱難苦勞も、願ひかなふて、うつせみの、息のうちなる今宵、いま、逢ひ見ることの歡しさよ、やよ、源藏よ、顏を見せよ、そなた母をさなかりし時、左の目ぶちに、腫物いで來し、その折に、眼の中へ針二本まで打たせし事あり、その針のあと、今もあらん、こちらをむきて見せずやと、口說たてつゝ、又把りしめて、涙は雨とふりそゝぐ、その歎はなかなかに、譬ふるに物なかるべし、天地ををがみ、町役人等をひとり〳〵にふしをがむ、慈母の哀歎無量の恩愛、今さら膽に銘じけん、源藏もはふり落つる涙を袖に堰きかぬれば、人のみな泣かぬはなかりけり。此ときしげが有りさまは、和漢巨筆の稗官なりとも、寫しとらん事易かるべからず、又、俳優の上手なるも、よくまねんこと難かるべしと、後にぞ人の評しける。かくて、源藏は、町役人等にうちむかひて。思ひがけなく、母親に名のりあひ候ひしは、御町内のみかげによれば、よろこび言葉に盡しがたし、やつがれは、十二歲のときより、親はらからに引きわかれ、ふる里白川に程遠からぬ某村にて、人となりしが、十八歲のとき、故ありて、親にも告げず、その地を去りて、江戶に足をとゞめしより、今茲は三十歲になりぬ、手かゝるもの、讀むこともしらねば、中間奉公しつるのみ。この春は下谷なる、戶田和泉守殿にをり、けふしも、守はいさゝけながら、志おちせ給ふにより、翌の日の當御番を、同僚がたにたのませ給ふ御狀使ひをうけ給はりて、其處へとていそぐ黃昏とき、こゝの中坂を過りし折、倒れし母を、わが母ぞとはしらずながらも、かいま見しは、得がたかるべき幸なりき。その時、母の足いたみて、彼處に倒れ臥さゞりせば、よしや途にてゆきあふとも面わすれせしことなれば、迯にまるよしなからん

な、事みな不思儀に候とて、感涙を流しつゝ、よろこびを述べしかど、町役人等うち聞きて、しからど、今宵は此處に老母を留めおきたりとも、けしうはあらぬ事ながら、母御のこゝろを推しはかるに、和殿を、はなち遣るべくもあらず、引きとらんといふ術あらど、町内より、駕籠を出だして、只今送り遣すべしといふに、源藏歡びて。下谷久右衛門町なる、番組宿屋、越後屋何がしといふものは、やつかれが親品なり、この處まで送らし給はゞ、いよ〳〵幸ならんといふ。そもそも、この源藏は、世にいふ宿屋ものにして、渡り中間なりといへども、物のいひざま、さかしげにて、身の皮もきたなげならず、偖己の時ぞかりなる松坂縞の布子を着て、胴かねしたる脇指を帶びたり。扨しかじかと、しげに告ぐるに、引きぢらされし敝袴裂などを、いとをしくや思ひけん、やよ、源藏よ、物とり遣すな、包め〳〵といひしかど、源藏は耻ぢらひてや、敝襪をぞ包みかねたれど、町役人等はさころど猜して、定番人に手傳はせ、物たちもなく包まして、かの、寺手形と、錢八百を源藏に渡しけり。その辭し去らんとせしときに、既に齡のかたふきたる、或は子供を旅にあらせて、親のあはれを知りたりける。町役人等一兩輩、又源藏を招きよせて。いふまではあらねども、九ケ年心力を錯されし、母御の辛苦を思ひくみて、孝養をな怠り給ひて、渡り中間ならずとも、さまで歴がたき世の中ならんや、大都會の忝さは、小商をしたりとも、只一はしらの母親を養ふよすがなからずやは、勉め給へと諭せしかど、源藏は感謝に堪へず。しかこころ得て候なり、故あることゝはいひながら、十三ケ年ふる里へおとづれもせず、わが母を見わすれしまでになりにたる、面目もなく候と、いらへて。やがて、母親を扶けて、駕籠に乘し移らせ。その身は間近くつきそふて、下谷をさして出でゆきけり、かくて、亥中の比

れひに、その駕籠のものかへり來て、かの、越後屋何がしが、よろこびの口狀を、町役人等に傳へしとぞ。予は間近きあたりにて、これらの事のありとしも、絶ゑてしるよしなかりしに、そのあけの朝、河越屋政八といふもの、柴の戸に音づれて。緊要の一條を告げまゐらせんとて、詣來しなり、例の虚病をおこさずに、たいめんを允し給へといふ、こゝろ得がたく思ひながら、書齋より出でゝ、よしを問ふに、政八がいはく。きのふ、いとめづらかにもあはれなる事の候ひき、その故ば云々と、前條を擧げて、說くこと一遍。やつかれ、今玆は年番にて、しかも、きのふは、當番なりき、これにより彼の婆々しげに、素生を問ひしも、又源藏に問對せしも、大かたはやつがれのみ、かゝれば、このくだりに就きて、かくつまびらかなるよしを、誰か亦翁に告ぐべき、又おきなゝらずして、誰かよく後に傳へん、願ふは賛して給ひねといふ。予感嘆のあまり、敢ていなまず、しばしうち案じて

面塗にあらで九ねんのたびごろも
　子をおもふほかに一物もなし

又おなじこゝろを

死なであひぬかたやまのての飯田町に
　ふせるたびゝとあはれ親と子

このふた歌を、たにさくに書きつけて、とらせしかば、政八は受けよろこびて、いとまごひしてまかり出でにけり。是より後も、日に月に、なほとし毎に。事のしげくて、いまだ、筆には載せざりしを、けふのまとゐの料にとて、聞きつるまゝにしるすのみ。(莵園小說)

文政八年乙酉秋八月朔

拍餅

森岡惟中

端午の日に柏の葉に餅を包みて、互に贈るわざは、江戸のみにて、他の國にはきこえぬ風俗にして、しかも又、ふるき世よりのならはしにもあらざるにや、ものに見えたることもなし。徳元が徘諧初學抄に、五月の季に見えず、かゝれど、寛永の頃より後のことか、寛文年間のものとおもはるゝ酒餅論といふ冊子に。彌生は雛のあそびとて、よもぎの餅や、端午にはちまきのもちや柏餅、水無月はじめの氷餅、嘉祥の餅云々といふことあり。延寶八年の印本、不卜作の俳諧向之岡に、柏餅の句あり

餅なりけふ世人はをみがく玉がしは　象豐

押しならべ兩葉が間やかしはもち　水巴

延寶九年の印本、言水作　俳諧東日記に

端午の御祝儀として柏木の森冬枯れそむ　旨月

升樓の山や梢の四方のかしはもち　象豐

これらの句によりておもふに、この頃よりあまねく節物となりけんもしるべからず、さて。予、過ぎし文化のころ西遊せしをりから、豐前の中津にて、端午の日にあひたりしが、菝葜の葉に餅をつゝみて、家ごとにもてしらへ、餅あき人も賣れるを見たり、名をば何といふにか問はざりし、案ずるに地錦鈔に、菝葜は、荆の類なり、葉丸く柿の葉のちひさき如くにて、葉中に三の筋あり、冬葉落ちて春出づ、秋あかく實あり、俗にサンキライとも、又はサルトリバラともいふは非なり、サルトリバラは葉の形槐の葉のごとく、花色本うこん、花の長さ一尺ばかりにて、針大きくありて、各別の物なり、又の名をカメイバラともいふなり。近ごろ、武州秩父の山中へまかりしに、農家客ある度に、小麥の粉を水に煉り丸くちぎりて、此のむらの葉を兩めんよりあて、柏餅のごとくして、はうろくに燒きてもちとなし、饗應しぬ。葉をとれば、餅に三條の紋見えてあいらし、猶しはらしくこしらへなさば、い

かにいみじき物ならんとればねしまゝに、家の女あるじに、是はこの所の名物にや、此の葉を用うるも子細ありやなど問ひ侍るに、聲高に打ちわらひて、何條事の候はん、是を龜甲餅といふ、此の葉をかめいむらと云ふ、葉の形龜の甲に似て、また齢を延ぶる大事の藥にも入るといへど、食して無害といひ傳ふと答ふ、さればこそ、いさゝかの人のこと葉も捨てがたしとは、かゝることにや、田舍人のいひすてに、殊勝なる事もこそあれと、おもひ出づれど、實にや襏襫は、屠蘇の一味なれど、長壽の緣にもなるべしやといふに併せおもへど、西國の俗のみにはあらぬか。ある册子に、大隅の片里にといひて、五月五日とて、松火あかしくなどゝあるところに、女は柏の葉にて黑米の餅を包みけるは、これなん上がたに見し、まこもの粽のかはりなるべき、とあるなど見えたるにても、江戸のみのこととも思ひがたく、もとより、木の葉はすべてかしはといふこと、いにしへの詞なれど、いづれの木の葉にもあれ、餅つゝみたらんは、かしは餅とゝなへんも難なるべし。

田舍

たけを

花の都の人は曰く、田舍は、たゞむさき所いぶせき所と。また、曰く、田舍は見るに足らず言ふに足らざる所と嗚呼田舍。田舍果していぶせき所言ふに足らざる所なるか。

地質學、礦物學、さては、動物學、植物學等の、田舍に密接の關係を有することは更にも云はず。かの、鄙びたり、だみたり、よこなまれりと、世に笑はれ嘲らるる田舍言葉は、言語學者の大に注意すべき所にあらざるか。

鎭守の森の里神樂村寺の庭の盆踊、さては、雨乞虫送

など、鄙の風俗習慣は、都の人こそをかしと笑へ、あやしと譏れ。風俗史の研究に、心を碎かむ人々には、面白くめづらしき材料を與へざるか。

この見すぼらしき野翁が耳に傳へたる不思議のいはれ、さては、あやしの野父が、爐うち圍みて、ゆかしげに語る昔物語の中には、はからぬ史料の含めるにあらざるか。また、かの、松風あはれに咽ぶ岡のあたり、葎生ひ繁れる塚の中には、思はぬ秘密の隱るゝにあらずや。

たゞこれのみにあらず、世にめづらしき文學史料は、多く田舍に埋れたり。田舍はまた、ゆかしき古蹟舊趾に富めり。古蹟舊趾は、過ぎたる歴史の形見にあらずや、古蹟口碑、もし、歴史に親しき關係を有するものならむ、田舍は、また、實に歴史に親しき關係を有するものなるべし。

ひとり歴史に親しき關係を有するのみならむや、田舍は、また、實に文學と深き關係をたもてり。かの吉野山は何れぞ、龍田の川は何處ぞ、花、紅葉に名高き名所は大概片田舍に散在するにあらずや。松島は何處ぞ耶馬溪は何れぞ。世に聞えたる山紫水明の勝地は、また皆、鄙の片はとりに限れるにあらずや。たゞに、世に聞えたる勝地勝景のみならず、自然の美は、到る處の田舍に輝き渡るにあらずや。

古人は歌ひけらく。

春の野に菫つみにとこしわれぞ
野をなつかしみ一夜ねにける

と、また

見ぬ人にいかゞ語らむくちなしの
いはでのさとのやまぶきの花

とまた歌へり。

葎はふ賤がかきねもいろはえて
光りことなる夕顔のはな

と
田舍は、ひとり、自然の美に富むのみならず、人生の美、また、此處に輝けり。見よ。飾多く僞り多き世の中に、ひとり、淸く麗しき玉の眞心は、柴苅る賤の女、荒小田かへす賤の男、さては、世に疎しのろしと嘲らるゝ、田舍漢の胸に、そのゆかしき光りを放つにあらずや。文學、もし、自然の美を歌ひ、人世の美を寫し出すものならば、田舍は實に文學に深き關係を有するものなるべし。

嗚呼思ひ來れば、田舍は實に、文學の上に、歷史の上に、語學の上に、離るべからざる因緣を有せり。田舍田舍、誰か田舍を、むさき所いぶせき所といふか、田舍、果して、見るに足らず言ふに足らざる所なるか。

軒の糸水　(一)

あめ

軒の糸水より〳〵に、むかしのふみより、やさしき、おもしろき、げにと思へるなどを、書きあつめおきたるが、箱にもあまるやうなりぬれば、そが中より、かつ面白くかつ敎へともなるものを、こゝにかきつらねんず。

（一）　物をひきのばす

ものを引きのばいて、時うしなふものありけり。人のさなへ植うるころ、たねほどこしてけり。葉月のころ、わせの穗の出でたるに、嵐ふきてければ、花ちりぬとなげくを、あまりにものいそぎし給へばこそあれ。わが稻は、この頃うゑしかば、あらしの災ひにもあひ侍らずと人にたかぶりけり。人のかりをさむるころ、少しばかり穗のみゑたるが、はや霜のおきてければ、みなかれぬ。ことしはいと早う霜のおきしなりとて、年をのみつみして、いまださとらざりしとなり。

（松平樂翁の花月草紙）

（二）　顔よりも心、名よりも行

女はみめの美しきが寵せられて、心の正しきを愛する人はまれに、物は形のめでたきを好みて、意のおもしろきを取る人は少なし。ある家の妻は、美人の聞えあれども、妬心ふかくして、夫の放埒なるをいきどほりつゝ、常に爭論絶えざりしが、ある時、妬みの餘り、夫の留守に縊れ死にたり。夫も、大酒のために、吐血して身まかりぬ。妻の名を壽といひ、夫の名を福太郎とよべり。人は、名よりも行にあり。松竹に千とせをいはひ、鶴龜によろづ代を比したりとも、家を治むるは和合にあり。長生は養生にありとしるべし。

（柳澤淇園の雲萍雜誌）

（三）　五堪忍

五堪忍といふことあり。聖賢の旨趣よりいでゝ、世業をなすの基、人間安穩の大悟にして、修身齊家の樞機なり。是を守る時は、勞する事なくして、家富み榮え、是を守らざる時は亡ぶ。衣服は、何の爲にか着る。寒さを凌ぎ、暑さをいとはんが爲なり。さあらば、寒からず着、暑からず着ば、麁服にても、厭ふことあるべからず。美服に奢るは、いまだ寒暑の身にしまざるが故なり。寒暑の身にしみなば、縫、裸にても、いとふものあるべからず。食事は、何が爲にかする。空腹をやめん爲めなり。さらば、添物はなくてありなん。添物なくて、食の進まざるは、いまだ飢に至らざるなり飢至る時は、糟糠をだもきらはず。家は、何の爲にか造れる。雨露をいとはんが爲めなり。さあらば、無益の造作などなくてありなん。水火の災に家を失はゞ、人の軒端にても、いとふ者あるべからず。妻は、何が爲めにか持てる。子孫を嗣がん爲なり。さあらば、子孫あるものは、妾などもたであるべし。妻子あるが上に、妾を持つは、色におぼるゝが故なり。財は、何の爲めにか求むる。世計の第一衣食を足らしめんが爲めなり。

さわらで、恥をもわすれてむさぼりたくはふるにもれよぶまじきことにこそ。　（仝上）

（四）世はさま〴〵

木曾の山中など、深山幽谷にて岩茸を取るには、籠といふものを造りて、綱をつけて、夫はそれに入りて、その妻、樹々の枝より下げて、つりおろし引き上げなどして、谷間の岩茸を取りぬるとぞ。下は、幾丈とも限り知れざるところなるよし、見し人ものがたれり。もしあやまちて、綱のきれて落ちたらんには、命なかるべし。又、伊勢の浦にて、海士の鮑取るには、乳のみ子なんど引きつれ、夫はかいをつかひゐて、舟もやひするに、妻は海底に飛び入り、こゝかしこ貝をもとむるうちに、子の乳を尋ねてよゝと泣く聲の、水底に聞ゆるにぞ、今一つ得まくおもへど、子の泣くこゑの聞ゆるにひかされ、浮びいで、舟べりに取りつきあへず、子に乳をそふる、其の有樣哀れにして、實に惻隱の心も發動すべし。世わたる業、さま〴〵なる中に、かかる過ぎはひする輩もあるものを、家にありて、その日を樂に過しつる身は、いとありがたきことにあらずや。　（仝上）

（五）蝦夷人の咄

蝦夷の人に飯をあたへしかば、いとよろこびながら、そこらくひこぼしてけり。やよ、米はたまの緒つなぐものなるを。など、かくおろそかになすかといへば、われらは米くひていのちをまたうするにはあらず。さけといふいをくひていくるといふ。さらば、さけのいをにて、いのちをぞのぶるならば、それをぞたうとぶべからん。いま、足にはきたるものは、鮭のかはならずやといへば、ゑぞしかしらかたぶけて、君のあしにつけ給ふわらうづとやらんは、かの米のいでたる草にはあらずやといひしにぞ、あなどるまじき事よと、人のいひしとぞ。わが國の人は、よその事をしらねど、ゑ

ぞ人のなりかたち、わが國の人とたがへど、いと愚にて何しらぬものよと思ふたぐひぞおほき。それより、からくにゝてもあれ、夷の人にてもあれ、たゞすがたのみなれぬをみては、はらかゝへてわらひ、ことばのわきがたきをきゝては、又わらふ。心せばく、よそみぬ故なるべしといひぬ。（松平樂翁の花月草紙）

伊勢物語をよみておもふこと一二

石榑千亦

「春日野の若紫」のはじめより、「つひにゆく道」の終まで、貫きとほれる心は、「おもふことといはでぞたゞにやみぬべき」の歌にいひあらはして、のこれる處なかるべし。

この物語は、業平朝臣の生涯の歷史なり、しかも明らかに、人に見せて憚ることなきわざをば記さで、暗くして、世に示すことを許さぬ夜の事をのみかきつけたる戀の歷史なりけり。

されど、この戀の歷史を殘さしめつるは、その世の罪にして、いかにともすべきやうなき理由のあることなりけむ、しかも、そをいひあらはす晝の歷史を世に示すことを得ざるは、口をしき限りなりしならむ。明らかなる晝のことを示すべからずして、その裏のありさまをあらはさでかなはぬは、まことあやめもわかぬ闇の世なりしなりけり、少なくとも朝臣に取りては。

朝臣が世にありしほどの半面をゑがけるこの戀の歷史よ、朝臣をおきては、望みても得ましきことなりけり、そはいかに志ふかゝりとせむも、企て及ぶべきことにはあらざらむ、位地朝臣の如く、容姿朝臣の如く、熱情朝臣の如くなるもの、稀なればなり、さてこそ、わづかにその半面をゑがきても、物語ぶりなるあはれにも、かなしくも、うれたくも、ありし世の見るが如くしらるゝなれ。

田村の帝の御心を知り、外戚のために、思ふまゝになし給はむとすることもなりまさぬを憂ひ嘆きて、もちて生れたる誠心は、遂に其身をかりて、變化多き一生を形作らしめぬ、されど、遂に勝つことを得ず、心をよせ奉りし皇子の飾をおろし給ひてよりは、世をやうなきものとのみ思ひけん、去かも、任重くして道遠きに、わが身の春の過ぬれど、いかにもどかしとおもひけむ、「をしめども春の限の今日の日の」と打誦じけむ夕ぐれ、思ひやりてだに憤ろし、まして、藤氏のために「櫻花ちりかひくもれ」といはひあげれる心の内やいかなりけむ、されど、こは晝の歴史なり、いひあらはされたる限にあらず。

さはいへ、この夜の歴史の中にも、星稀に、月明らがにて、晝の面影とも見つべきことこそあれ、かの惟喬親王に仕へし條、しかも、小野にうつりしませるに、雪いと高き比叡の山本をしのぎて、昔の名殘夢にも見えませぬ世にも、宮仕してありながら、怠りなく通ひ奉りけむこそ、闇の中の闇なれども、朝臣の赤き心を見るにはあまりありぬべし。このことはのかにだに記されずど「さらぬわかれのなくもがな」と、母君をしたへるまゝ心あらむも、衣を與へし深きなさけあらむもたゞ世の常の、あらず、天下の色好の例と思はれぬべきを、あはれ、心よりれでれるにて、世を斷ひたらむとはよも思はざるべきを、又「れもふこといはでぞ」の歌も、何のこともわきがたかるべきを、自ら殘しれかれつるか、後の世の人もとめてかきいでつるか、かにかくに、朝臣も地下に瞑すへき書ざまなりけり。

あはれ、この物語の地の詞をばしがきと見なして、歌集となさむも、歌文を學ぶむ栞となること、東下りの文は妙にして、富士の高嶺の高き姿なることなどは、こゝには說かず、そは「われとひとしき人しなければぞ」と、打なげかるべければなり。

寺小屋考

寺子屋てふものは、昔時子弟を教育する、唯一の、小學校といふ名稱のみ、蓋、其の名稱の起を考ふるに、遠くは、天長五年十二月十五日に始めし、綜藝種智院、下りて、足利時代にわたり、諸國、いまだ、子弟を教養するの道、ひらけさるにわたり、先、僧侶に命じて其地方の最寄によりて、兒童を教養せしめしに依り、寺子屋といひしならん。新井白石の說に、寺子屋は、寺小屋の轉訛にして、兒童の初めて、佛寺に入りて、もの學ふ者をさして、寺居といふ、寺居とは、てらゐにて、てならひ(手習)の轉語にもとづきしなり。故に、師家をさして、寺小屋といひ、學ぶものを、寺子といふ。今は文字すたれて、唯、書を學ぶ事にのみなりたるも、何者か、寺居の訓によりて、王充か、論衡の書に書きかへて、寺居をも、手習の字になしたるなり、故に、寺居子を轉じて、手習子となしたるならむ。又、證すへき事あり、羅大經が、鶴林、玉露に、日本の僧、安覺、宗朝へ渡りしとき、彼の國の人、日本の事を問ふに、安覺答ふることあり。硯をとへて松蘇利必と答へ、筆をは分直と答ふ、秀才(生徒)を問ふに、殿羅罷(寺居の訓)といへるにや。今又考ふるに寺居の訓はてならゐにて、ゐの假字なり、手習の訓はてならひにて、ひの假字なり。されど後に、寺居をも手習の字にかへたりし時は、後の世にして、假字に心つかざりしなるべし、安覺か、秀才を寺居と答へしは、手習の訓によりたるや、時の語音を、彼の國の人、聞ゐしまゝに書たるやうなるべし、い、ゐ、ひ、れ、を、ゑ、ゐ、の音を、彼の國の人、譯に用うるとき、混雜せしなり。わか邦の人の、正しからざりしか、彼の國の人、聞たがひしか、日本風土記、日本奇語等に勝りて、敎ゐ難し。今こゝに、假字の論、擧げて申すべきにあらざれども、近時の古言家と稱する者の饒舌容さ

れざるが爲にしるす云々と。骨董雜記に見えたり。

此の寺子屋の師たりしものは、概ね幕府時代にありては、諸藩士、浪人、書家、醫師、隱居、神主、僧侶にて、其他婦人にてもありしなり。

其の教科書ともいふべきものは、何れの國、何れの師を問はず、略一定せるものにて、其の男子に授くるものは、いろは、數字、都路、村名、名頭、名字盡、江戸方角、男今川、商賣往來、消息往來、庭訓往來、千字文、唐詩選等にして。女子に授くるものは、いろは、數字、源氏、名頭國盡、女江戸方角、女今川、商賣往來、女消息往來、庭訓往來等なりしなり。而して、書法には、大略、和樣、唐樣の別なりしも、唐樣は、書家の占有にて、一般にひろく行はれしも和樣中の御家流と稱するものなりし。

今、江戸に於ける、寺子屋の有名なるものを擧れば、芝濱松町の芝泉堂、番町の土肥丈谷、下谷の五松某、佐内町の柳華堂、牛込の岩田芙山　淺草代地の林泉堂、淺草三筋町、及び黑船町の坂井兩家、芝西應寺町の深海堂、下谷の梅澤臺陽、京橋瀧山町の殿岡等なり。（住山幾子寄稿）

さなへ

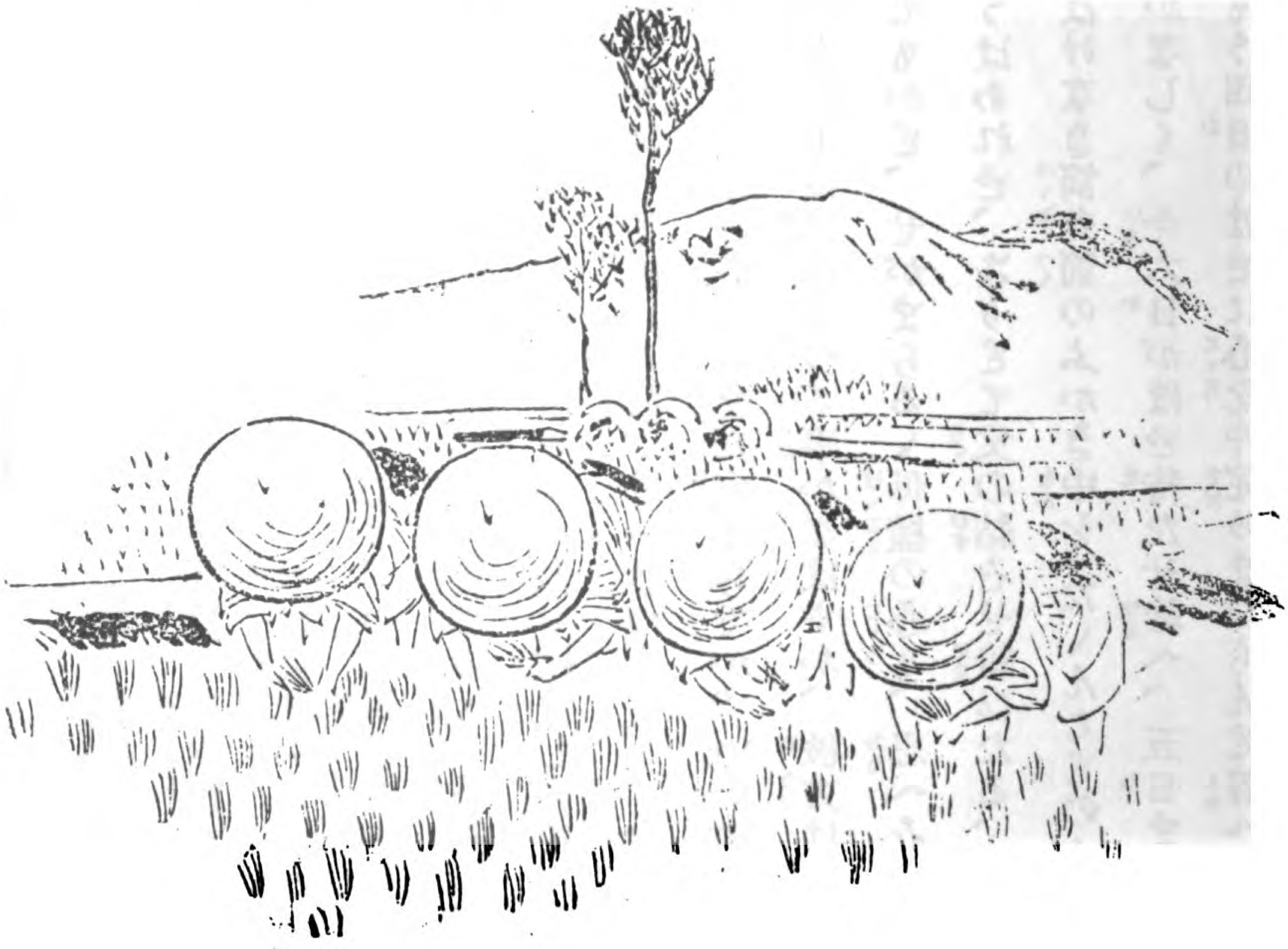
草の屋主人

野山の花を外にして、里のしづの女が、荒小田を鋤きかへしたるは、なほ、わづかに、昨日のやうにおぼゆるに。はや、苗代の水も豐に、わかやかに生ひ立ちたるさ苗、緑の色あざやかに、露こぼるゝばかりうるはしきが、しづかなるあしたの風に、やさしげに、よりよりとなびきたるけはひは、おひさきのにほひもこもるなる女のわらはを見るやうにおぼえて、げに、うちむかふ心ぞ慰む。殊に、雨はれて、露の白玉清げにむすびて見るは、撫子ならねど、塵をだにすゑで、床の

ものども見まほし。

たもとはうきによてるれど、心は、さ苗の、おなじ清げなる里人どちが、君のため、人の爲め、親のため、いもせのため、子のため、わがため、袖もはぎもひぢて、さ苗取りつ植ゑつ、いそしむさまも、身にしみておぼゆれど、また思へど、うたふ田うたも樂しげに、にぎはしげなる大平の民のいとなみ、これも、明き君が大御光りにあへどころと思ふに、涙もこぼれて、ふしも拜まるゝなり。

夕日はや傾きかゝる門田、なほかへらむともせず、むつまじげに、袂つらねて、さ苗とりいそぐ妹と脊の姿も、何となうゆかしくおぼゆるに、出で立ちて、つくづくとうちまもれど、わかき者も出で來りて、おな、はやう生ひ立ちたることよ。蒔きたるは、昨日今日なるにやがて。穗も出でなむ、刈るべき時となるにこそ、たやすきよといふ。げに、さなり。日數はたやすし。



されど、ろが間の百姓の辛苦は、いかばかりなし。根をかため、草をひき、水をはかり。虫をいとひなど、もゆる暑き日にも、汗ぬぐふいとまさへなきなり。さてころ、汝れらか玉の緒をつなぐうるはしきものは作らるゝなれ。よそ事にな思ひそといへど、やゝたけたるが、さなへとはいかなる心にてかととふ。さなへといふは、早苗の早(わさ)のわが略かれたるなりといふ説もあれど、わが敎への師なる黒川大人の語られしは、さ苗は田苗といふ事にて、さは田と仝じなり。田に植うる物は稲なれど、田苗にて、稲の苗をいふなり。五月をさつきといひ、さ苗を取る少女をさ少女といひ、田の小屋の事をさやといひ、五月頃の雨をさみだれといふなどは、皆、田に關係ある物や時なれど、しかいふなりと敎へられたり。さる事にもあらむ。とまれかくまれ、かしてに里の子がさ苗いろしみ作るが如く、汝れも勉め勵みて、よきさ苗の説をもしたて出してよ。

村雲（その四）

白魚女史

父の恩のありがたきを、かづ子は、思ひ出づるたびには、佛前にぬかづきし事は、日に幾度かありたれど、未だ神をたのまんなどの心は、つゆ覺ねざりしを、思ひきや。此の頃、思はぬ人に思はるゝくるしさ、思ふ人のつらきよりはまさるに、たゞ杖はしらとたのむなる母親は、子故、人故、といきつく〳〵、やよ、かづ子。ろなたの心はいまだ定まらでか。いかにあるとも松丸の上は思ひすつる事かなはずか、彼方は思ひすててもかと、せがまるゝ母樣の心も、思へどいとはしうはあれど、さりとて父の結ぼせ給ひたる、しかもいはけなき筒井筒のふかき中を、たゝんことのくるしく、かなしく、今六日がほど待たせ給へ、五日まちてよ、もう四日のほどに心をや定めまつらんと答へつゝ、たのむは白糸のたき一筋、身の罪業をもすゝぎ、人の玉





の緒、わがゑにし、つゝがなく結びとめたまひてと、一心にいのる娘心のあはれさ。神は如何にかきくらむ。

母親は、かづ子が白糸のたきにたのみをかくると云ふ事は、夢にも心づかず、二葉よりなる松丸とのゆかり忘れもたちもやりがたさに、今日よ明日よと、さばかり云ひ拵へてならんと思ひつゝ、のう、かづ子。思ひまどうは道理なれど、相思はぬ人を思ふは、大寺の餓鬼のしりへにぬかづくが如しと、いにしへの人も云ひしにはあらずや。あたら花の大丈夫が命あだに散らさで、まこと國のため、君の爲めなる時あらしむるも、たゞ汝れの心一つ。をかしき例へながら、あぶは殺し、蜂にはとられずでは、甲斐なからんと、母は思ひてなりと云へども、なほ、三日のほどまたせ給へ、よく〳〵思ひ定め侍らんとばかり云ふなるに、母親は、いと思ひわづらはしげにて、子なきにしかずとは、かゝる身をこそ云ふならめ。よき娘もちたるが、かなしみの種子ぞとて、老はほ〳〵と立ちも行かるゝかげ、いとほしや消えもせられげ、かづ子はあなた此方のかなしさに、ひせびかへりて、ひとりよゝと泣き沈みたるが、はては涙ながらにいのりつ、くどきつ神々を。げにやくるしき時の神だのみとは、うべも云ひし事や。

＊　＊　＊　＊　＊

かづ子は、まだ起きでか。いつに似ずれそき事や、一方ならぬもの思ひ、もしや心地わづらふてかと、朝まだき、母親は、かづ子をとふに、いかにしけむ、答へもなし。あなよくもねぶりたるよ。あるがやうにても、なほいはけなき娘心のをかしさよ。母はとつおひつ思ひたどりて、よもすがらまどろみもせであかすものをとつぶやき、ひきかへして其まゝおとなふは、靜子が方。

此の二日三日いたつきの少しは怠りたる靜子は、人の

足音に、首をもたげて、母樣におはしてか、姉上かと思ひき。さるにても、姉上は如何にか遊ぞしてなるか。久しうおとづれ給はずと、枕のちり拂ひつゝ尋ぬるに、母は少しほゝ笑みて、先きつ日、かつ／＼聞えしが、姉上は、いよ／＼その士官の處へよめらすれど、何かといろしう、其方を見まはんとは云へど、母がとゞめてなり。そちも早うようなりて、何なりと手傳ひまゐらせよ。お兄樣は。松丸か。松丸はかはりし事はなけれど、何も何も人のために。かたくなのみは云ひ居られねど、そちが、いとはずど、もとより同じはらからなれど、姉のかはりに、そちと結ぞん心、とまれ、秋もはやはつると云ふに、さねてのみくらす事やある。心強うもちて、早うかづき、姉上の調度づくにて御手傳ひまゐらせよとうち笑みて、をりふし朝の光りに匂ひかゞやく庭の紅葉よりも、何色か、あかくてりろふ靜子の顏、見知らぬさまに、またとつかはかへして、も

はや起きてか。日ものぼれり。つねに似ず。かづ子よと呼びおとづるれど、なはいらへなし。さてものどかにはねぶりたるものかなと云ひさま、ふすま明くれど、てはろもうつせみのもぬけの床、心はとみにとゞろきかゝれど、露淸き庭の朝風に、夢路の塵を拂ふてかと心をしづめ、彼方此方見まはせど、見ねず人にとへど、知りたりと云ふものもなし。もしや佛の居間にかと、其處をも尋ぬれどあらず。しをり戸のほとりそよ／＼と音のきこゆるに、胸なでつゝ立ちよれど、なき夫が植ゑにたる玉笹のそよぐのみにて、影もあらず。あな何處にかとて、立ちかへる袖に何となう身にしみ亘る葉分の風。思はず身をふるはしつゝ、我が屋部にと入りしかど、心もおちつかず。またもや、かづ子が部屋に入りて、むなしき床をうち守るに、いよ／＼胸うちさわぎ、そゞろに思ひ出でらるゝ忘想、もしや娘心に思ひせまりてにはあらずや、殘しゝものにてもあらず

やと床をも上げ、机、簞笥、鏡臺、針箱、文庫、あるかぎりくまなくさぐれど、見えぬものもあらねど、見ゆるものもなし。はては、婢女どもを呼びたてゝ、不注意をせむれど、もとは已れの不注意。心にとへどくるしく、家の事は、其のまゝにおきて、早う〳〵人々して手を分けて尋ねてよ、たすきなどはづしをらで、下駄などさがし居らで、はやく〳〵。時すぎてはせんなし。田舎ものや、さやうに日まどりては、火事などには、やきも殺ろされんなど、已が心のあわつるまゝ、婢女どもをのゝしりちらして、出したるあとに、立ちて見つ、居て見つ、外に出でつ、門にたちつとかくに心おちつかず待ちわぶるもことわりや。

走らせやりたるはしたどもは、見わたらざりし、見つけざりし、心あたりに居らせ玉はざりしとて、あるは晝つ方、さては八つ頃、おろきは夕まだきにと、皆々むなしく歸り來るに、今はたのみのつなもきれはてゝ、閉こもる一間の内、朝のものも、夕のものもまゐらず、二日思ひくらし、三夜案じあかせど、身もやせにやせて、魂魄もいつしか狂ひ出でつゝ、をり〳〵もらすあやしき言葉。嗚呼わろかりき。わろかりき。憎む心は夢もなくて、迷ひたり。殺す氣はつゆなくて、殺したり。我はろも惡魔なりしよ。惡魔なりしよ。人の皮をきて居るが恥かし。などまよひき、迷ひし心憎し。にく〳〵我が心にくや、一の女子を、姉上の子を、殺して、殺して、いかでか人のかずにかずまへられん。悔ひても歸らじ。わびてもきかれまじ。淺ましや〳〵。妾に姉上とは、同胞と云ふが中にも、年さへ、日さへ、月さへ、同じに生れたる同胞、身體はよしや二つなればとても、顏も聲も同じなれど、心もおなじなるべきに、姉上は高、妾は賤と呼ばれし父上の名づけ方のあたりし事や。はづかはし、我が身はづかはし、姉上がかづ子を生まれてより三年目、重き病にかゝられ、最

斯の折り、我もればして、妹を。さらぞ、かづ子もかはらぬ母と思ひてならん、妾もうしろやすうゆかれてにと、返すゞもたのみおかれて、身まかられしからに、此處に呼びむかへられたる時、その時、あのかづ子が、母樣が歸られき、うれしやとて、はひまつはりて、まはらぬ舌に、もう箱の中へは入りてはいや／＼と云ひたる時のかあいさ。それよりは厠に行くにさへ、われも伴れてよ、共によ、一所によと、かづ子がつきまとひしかなしさ、何とて人の子と思はるべき。われも賤の名さへ高とかへられ、たゞ姉になりたる心にて、ひたすらになでものといつくしみ育てしを、わが子が、ふと此の頭重き病の床の露、もとの雫をそれと知るに、あながちに結びとめまほしく思ふ心のやるかたなさに、いつしか踏みまよふ邪路。思ひこがるゝ人あると云ふを幸と、思ひたくみたる妾が罪、夫に姉に何と云ひわけせん。今頃は、かづ子、今までは、たゞ我の子とのみ思ひたらんを、生みの母に逢ひて、嘸やれぞろきてならん。嘸かしと思ひつゞくれぞいつしか霧に沈む軒の夕日かげ、つく／＼とながむるやうなりしが、ふら／＼と立ち上りて取り出す短刀、どつかと仆れかゝりて、死ぬ、死ぬ、申しわけに、よしや死ぬとも罪は消えじ、消ゆべき罪にはあらねど、今よりならくの底におちいりて、思ふまゝくるしめられんが、せめてもの罪亡ぼし、と云ひさま、取りなほす短刀、をりふし吹きすさむ風にはら／＼と散りかゝる木の葉の影さむし。

文林

螢

徳大寺實則

夕やみを我がときなりとやり水に
すゞしさそへて螢とびかふ

樹陰水

立よれはぬらさぬ袖もしめるまで
木かけ涼しくすめるましみづ　近衛忠煕

曉旅行

夜をこめて麓をたてはこねやま
たかねよりこそ明そめにけれ　佐々木高行

夕郭公

ゆふ月夜わづかに匂ふやまのはに
一こゑなきてゆくほとゝぎす　鍋島直大

竹風

今宵またたけの夜風やたちぬらん
みねかくれする里のともし火　高崎正風

庭夏草

夕かせの吹こんみちもなきはかり
庭のなつ草しけりあひにけり　黒田長知

野郭公　毛利元敏

ゆふ日かけ松にのこりて雨はるゝ
山のすそ野に鳴くほとゝきす

夏月

おりたちて庭のやり水むすぶてに
亂るゝつきもすゞしかりけり　長谷信成

海邊朝

見わたせは波のほ白く明けそめて
おきの小島にあさ日さすなり　諏訪忠元

田上螢

繁りあふ田の面の稲葉つゆ見えて
照すほたるのかけのすゞしさ　宮地厳夫

谷新樹

かけ高き木立のわかはしけりあひて
谷はあさくも見え渡るかな　千葉胤朋

躑躅

池の邊のつゝじの花もゆふされは　伊東祐實

こがるゝ色をみづにもゆらん

郭公　林　璽臣

郭公はつ音きゝつとうちほこり
やまざと人にわらはれにけり

月照新樹　黒崎仙太郎

のもやまも若葉のかげとなりぬれど
月なつかしきにはのれもかな

牡丹　木庭芳香

れはかたの花はすぎにし庭のれもに
ひとりときめくふかみ草かな

源義光　三輪義方

武夫のみちのはかなるみちの名も
たかくきこゆるわしがらの山

常盤御前　石原均

子を思ふはたし絶なでをみなべし
わた野の風になびきふしけん

樂未央　安齋篤敬

思ふどち語らふ夜半のたのしさに
あかつきつぐる鳥もうらめし

奈良義成の妹　佐々豊水

伏見山ふもとをめぐるよどがはの
ふちの鏡のくもりなきかな

殘花　近衛貞子

夏木だちやゝしげりゆく山かげに
かくれて殘るはなもありけり

霞中雲雀　鍋島榮子

野べ見れどあがる雲雀のこゑ計り
かすみの中にきこえけるかな

庭卯花　蜂須賀隨子

一むらの庭のうづきをよそめには
まどに集むるゆきとこそ見め

山家夏　前田朗子

花ちりて問ふひとたへし山さとの
こかげ涼しきなつは來にけり

時鳥幽　柳原愛子

五月雨のくもまの月のかげよりも
こゑかすかなるほとゝぎす哉

葵　小池道子

ほとゝぎす遲きことしもみ祭りに
あふひは時をたがへざりけり

路卯花　松平健子

田舍みちそゝろありきも面白ろし
うつき垣根のにほふかぎりは

山新樹　日野西廣子

おしなべて若葉しげりぬ吉野やま
いづれさくらの梢なるらん

夏露　保科節子

梅雨はけさはれそめてわがたけの
まき葉にすがる露のすゞしさ

瞿麥　伊達泰子

さらぬだに吹きたはみたる撫子の
はなにあしたの露ぞおきける

庭梅雨　河村重子

池の魚もながれいづべくなりにけり
ひをふる庭のさみだれのあめ

初郭公　田邊和氣子

ほとゝぎすもらしそめたる一聲を
千こゑになして人にかたらん

月前橘　海上壽子

月夜よし夜よしといひてたちばなの
香るつま戸はさゝで寐にけり

夕蛙　師岡須賀子

せき入れし苗代小田のみづたまり
夕ぐれかけてかはづなくなり

橘　全人

たちむなのかをれる夜半は古の
書見るさへもうれしかりけり

夏花をよめる歌　海上壽子

故郷の、荒野のを草、とかまもて、賤もからなく、ふみわけて、駒もすさめず、いや日けに、茂げりあひぬる、ろこをしも、我し來ぬれど、塵たにも、すゑじと思ひし、床夏の、花も咲きけり、露だにも、むすぶをいとひし、姫百合の、花も匂へり、咲匂ふ、花しめずらし、あはれ〳〵、見る人なしに、日數へて、花のさかりの、すくらくをしも

花籠　霽月

うら〳〵と、霞める春の日にあひて、花も笑ひ鳥もうたふものを、心あり情ある人間にして、いかでたれ籠めて、造化自然の美妙をめですてあるべき、一年の中、春は再こず、花のさかりは一時のみなり、かゝる折にしも、徒に不平を洩すもかひなし、怒りて見ても益はあらず、うきつらさ、憂ひ悲み、すべて忘れはてよ、うたうべし笑ふべし、我この心もて、うめきいでたるもの數首になりぬ。されども、かの花になく鶯はかけても及ぱず、水に住む蛙にだに倣はゞやとてなむ。

惜花（八首）

花だより昨日もありきけふもあり
いづれの山かまづはとはまし

昨日みし人にまたこそあひにけれ
けふをさかりの花のこかげに

櫻狩きのふさろひしひとにまた
さろわれてゆく花のしたみち

うきつらきなべて心になかりけり
わらはぬ花のあだもあらねど

けふころは花のまさかり飛ぶ蝶の

羽風にさへぞこゝろかるゝ

ちる外はあらじと思へぞ措まれぬ
　咲とさきにしやまざくらぞな

春の色のいたらぬ隈もあらざらむ
　四方のやまべの花のしらくも

とぶ蝶をひとひらちると思ひけり
　さきつくしたる花のそのふに

折花（八首）

をらるゝを櫻はうしと思へぞや
　たちよる袖にちりかゝるらむ

とは山の雲とながめしさくらぞな
　一枝をりて今日はきにけり

心して折れどもなはや觸れつらむ
　袖に一ひら散るさくらかな

ひとゑだはゆるせ櫻よ手折るころ
　めづる心のきはみなりけれ

いざ櫻手ごとに折りて世のひとに
　みやまのおくの春をみせむや

たをりてやいへづとにせむ玉鉾の
　みちの行くての山ざくらぞな

木づたひて散す鳥だにあるものを
　ひとゑだ許せ花のやまもり

見れども〳〵あかぬ心のすさびより
　折りてきにける山ざくらぞな

時鳥を待つといふことを

青苔

定めなき心は花より花にうつろひて、四つの時をりをりごとに安きひまもなし。梅もすぎ、櫻もちりぬれぞ、鶯の音の何となう古めかしうればゆるに、朝戸あけてめづらしときゝしは、夢かとさへもはれぬ。實に、退くにも時はありけり。木々は緑にえげりあひて、蔭なつかしきはとになりぬれぞ、時じくに常盤なる橘

の葉も一入色まさり、なつかしくさきにほひたる花さへ、世にめづらしきにをひなりけり。昨日は櫻のためにいとひし風のまたるゝ今日此頃、かの山の棲所までふきつゞきて、去年の古聲名のりいでよと、さそひ來るべき使ともなれよかしと思へど、つゆ通はぬにか、今宵も二十日の月さへ出でぬれど、未だ音づれぬことのうらめしさよ。またぬにきゝつと聞しこともあれど、いでふしどに入るべきか。わわれ、月もやうくゝ高うなりぬるを、まてしばし、いぎたなしと笑はれむも面ぶせなり、わか心やいかにと試みてあらむもはかりがたし。月の傾く空になかしともいはれじ。この月、この花、こよひをれきていつか來鳴かむとはすらむ。實にをもへど、進むことを志らぬ鳥なりけり。かくまで待焦るゝ心を知らぞ、五月ならでも。わわれ、何くれの花よりもなほ遲かりけり。動物なれどにやあらむ。さるにても、雪の中より名のりいでしかの鳥をならひなむには。



●天皇陛下陸軍士官學校に幸し玉ふ　陸軍士官學校生徒卒業證書授與式は、去る廿七日午前九時三十分を以て執行せらる。

天皇陛下には、豫て仰出されたる如く午前九時御出門、德大寺侍從長御陪乘、土方宮內大臣、其他侍從等の供奉にて、同三十分御着校あらせられぬ、扨同校にては、七時頃より校長波多野大佐以下、校員一同、出頭して諸事の準備を爲し、又野津大將、佐久間、山地、黑川の三中將、黑田、寺田、佐野の三少將、石黑軍醫總監以下諸將校も朝より出校して、聖駕を迎へ奉りしが、陛下には軈て校長御先導にて便殿に入御、暫時御休憩の上、叅校の勅任官幷に校長に拜謁を賜ひ、畢て校長御先導、中庭

に於て、先づ生徒の觀兵式に臨御あらせられ、夫より順次、歩兵中隊教練中隊長邦彦王殿下、小隊長守正王殿下、野戰砲兵中隊教練、海岸砲操法障碍飛越演習、及卒業歩兵科生徒西本國之助、同野戰砲兵科生徒兼松習吉、同工兵科生徒靜間知次の講演ありて、便殿に入御、此時卒業生徒の對策及び測圖築城圖等優等の分を天覽に供し、更に校長御先導にて式場に臨御、卒業證書授與畢て便殿に入御、暫時御休憩の上、天顔麗はしく還御あらせられたり、當日　陛下には元帥の軍服を召させられたれど、殊に御勇ましく見上げ奉りぬ、尙は今回の卒業生は、歩兵科、騎兵科、野戰砲兵科、要塞砲兵科、工兵科を通じて、二百四十五名なり。

●皇后陛下誕辰奉祝式　去月二十八日は、畏くも、我が　皇后陛下第四十七回の御誕辰日に當られ玉ふを以て宮中にては、御祝賀式を執行せられ、東宮殿下は歩兵大尉の正裝にて、午前十時花御殿御出門、御參内にて、兩陛下へ御對顔あらせ玉ひ、特に母后陛下に御祝を申し上げさせ玉へり。尙、各皇族、大臣　樞密顧問官、文武各官等、皆參内御祝詞申し上げ宮中にては特に酒肴を賜はりたり。

又各女學校には、皆君が代を吹奏して、聖德を奉頌し、授業は半日にて休み、以て祝意を表したるが、各小學校も、右同樣一般授業を休みたり。

●皇女御命名式　先月十一日、青山御產所に於て、芽出度御降誕あらせられたる、皇女の御爲め、去十七日宮中に於て御命名式を行はせられ
泰宮　聰子殿下と御命名あらせ給ひたり。

●皇后陛下女子高等師範學校行啓
皇后陛下の常に大御心を、女子敎育に注がせ給ふは、衆て承はる所なるが、去月十八日も、女子高等師範學校に御行啓あらせられ、親しく、敎育の實況を御覽遊ばさるゝぞ實に畏き御思召にこそ。宮城御出門は午前九

時三十分、御陪乘は高倉典侍、供奉は香川皇后宮太夫、宮內書記官、侍醫女官等にして、仝十時、御順路御道筋を仝校に着御あらせらる、細川仝校長、西園寺文部大臣、牧野文部次官、木場普通學務局長等を始め、同校職員一同は、玄關に、諸生徒、兒童幼稚生は校內遊歩塲にて奉迎し、細川校長の御先導にて、樓上に設けられたる便殿に入御あらせられ、暫時御休憩の間、校長、敎諭助敎授、舍監等へ拜謁仰付られ夫より、校長御先導にて、左の順序によりて、各敎室御通覽あらせらる、

(一)本校第四學年地文、第三學年國語、第二學年心理大意、第一學年勅語衍義

(二)附屬高等女學校補充科國語、第六學年圖畫、第五年甲習字、第五學年乙物理、第四學年甲本邦歷史、第四學年乙家計簿記、第三學年作文、第二學年、第一學年裁縫

(右凡一時三十分)

(三)附屬小學校第一部(多級尋常小學校)、第四學年讀書、第三學年手工、第二學年圖畫、第一學年唱歌

(右凡三十分)右終り、正午再び便殿に入御、宮內省より御用意の晝餐を召させられ、暫時御休憩、午後一時頃より更に

(一)本校隨意科外國語第三學年

(二)附屬小學校第二部(多級尋常高等小學校)、高等科(第二學年第一學年)本邦地理、尋常科(第四學年第三學年)修身、尋常科第二學年算術、第一學年作文

(三)附屬小學校第三部(單級尋常小學校)、習字、讀書

(四)附屬幼稚園分室組置き

(五)附屬幼稚園本園一の組遊戲、五の組豆細工、二の組庶物話、三の組環及箸、四の組唱歌

(六)本校及附屬高等女學校本校(第四第三第二學年)體操、附屬高等女學校(第四學年第三學年)遊戲

(右凡一時四十分)

右御順覽を終り、再び便殿に入御、暫時御休憩の上、午後二時頃還御仰出され、文部大臣以下、奉抑の時の如く、玄關前にて奉送し、生徒一同は門內御通路の兩側に整列し、君が代の唱歌を謡ひて奉送せり。

●御歌會御兼題　五月五日宮中御歌會御兼題の御歌は左の如し

れそさくら

夏山の青葉かくれのはなみれむ　　高崎正風
我のみ世にはれくれさりけり

うの花にさきたつ雪や大かたの　毛利元徳
春にれくれしさくらなるらむ

ちゝふねは夏なは寒み山かけの　渡邊千秋
雪けのみづにさくらちるなり

夏山にのこる櫻ははつはなの　津輕承昭
こゝちせられてめつらしき哉

大方の春にれくれてさくらぞな　松浦詮
みる心さへのどけかりけり

水枝さす木々にかくれて山影に　葉室長邦
にほひのこれる遲さくら花

尋ねいるひとのためとや遲櫻　慈光寺有仲
みやまのおくにさき殘るらむ

こゝにのみ春も殘るとみゆる哉　町尻量衡
み山かくれのれそさくらはな

春よりも都の人のとひくなり　梅溪通治
遲さくらさくみやまへのさと

昨日けふ春も終りになりぬるを　水野忠
また吹きいてぬ遲さくらかな

鶯のかへるみ山のれろさくら　淸岡長延
木かけは春のこゝちころすれ

よの中の春におくれしさくら花　柳原愛子
さひしく殘るやまのかげかな

れしなへて青葉となりし山影に　小倉文子
さきれくれたる花もありけり

夏寒きみやまかくれのれそ櫻　樹下範子
くれにし春もしらてさくらむ

山吹もちりし貴舟のかはかみに　税所敦子
ひともとさけるれそさくら哉

つゝしさく岡への松の木隱れに　小池道子
匂ひのこれるはなもありけり

春すきて茂る若葉の木かくれに　北島糸子
今吹き出つるはなもありけり

遲るゝはものすさましき世の中に　黒川眞頼
なほわかれぬは櫻なりけり

わひてすむ心に花もならふらむ　坂正臣
わか庭さくらおそくさきたる

今はゝやはるもきのふと杉村の　油小路隆元
このまに匂ふおそさくらかな

きそ山はいまさかりなるおそ櫻　六條有義
都にしらぬはるをのこして

散殘る花もありやときてみれは　清岡長言
青葉かくれにさくさくらかな

夏山の山ふところにわけいりて　鈴木重嶺
風をさくらのはなをみしかな

遲れては花もはえなくみゆる哉　小出粲
時うるはかりめてたきはなし

花もいまさかりなりけり旅衣　植松有經
きそ路は夏そこゆへかりける

麗はしき若葉の中にましれとも　大口鯛二
けたれぬ色はさくらなりけり

をかのへの青葉の中に遲さくら　鎌田正夫
ひともとみゆるやとはたか宿

よの春におくれてさける櫻花　千葉胤明
をりかさゝむとする人もなし

足引の山ふところのおそさくら　遠山英一
さきいてなから葉隱にけり

遲櫻にほふをみれはさりともと　鶴久子
時すきし身もたのまるゝかな

●愛敬女學校の開校式　此程、赤坂檜町に新設せられたる、愛敬女學校にては、去る二十三日午後一時より、開校式を擧行せしが、當日の來賓者は、九條公爵、松平伯爵、久我東京府知事代理山縣書記官、赤坂區會議員、學務委員、小學校長其他區內の有力家等無慮二百餘名にて、先づ校主中里日勝氏は、同校設立

の主意を述べ、次て松平伯爵の祝辭、校長桑田衡平氏の答辭其他敎員總代生徒總代、淑德女學校代表者の祝辭等あり、終りて點茶彈琴（新曲御國の光り彈者五名唱歌十名）あり、又室內には裁縫製作品活花抔の陳列ありて、中々に盛式なりき。同校は本年二月一日始業、日淺きにも拘らず、入校生は已に三十二名に及べりとのことなるが、同校敎育の方針は、西洋流の婦人の敎育を斥け、純然たる日本婦人を陶冶せんとするに在りと云へり。

●幼稚園敎員の養成　今度女子高等師範學校にては、特に保姆養成の方法を取調ぶることゝなりたるが、其取調の方便として、保姆練習科なるものを設け、本年九月頃より實施の見込にて、目下文部省にては、同規則等の取調中なりと云ふ。

●檢定試驗の優等者　文部省に於て行はるゝ、尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校の敎員檢定試驗は、今年にて十回目なるが、數學科の全科に及第せしは今回の服部一二氏を以て初めとす、又同科にて婦人の及第者は、幾何までの分これまで一兩名あり、今回は上野淸氏の息女も亦此中に在り、又外國語の及第者に婦人を出だせしは今回が初めにて、佛語科に二名內一名は農學士菊池熊太郎氏の令妹英語科に二名內一名は米國に遊びしものなりと云ふ、其他國語科は、男子より女子の方及第者多かりしとのことなり。

●戰死遺族慰問婦人會結了す　明治二十七八年の役に戰沒若くは病死したる軍人遺族慰問のため、小松宮妃賴子殿下の令旨を奉じ、各皇族御息所殿下、並に華族貴婦人八十二名首唱者となり、兼て外征軍隊戰死者遺族慰問婦人會なる者を組織せられたりしが、去る廿二日は同會首唱者の協議會を、日本赤十字社に於て開かれ、小松宮妃殿下を始め奉り、各皇族御息所殿下、並に各首唱者一同集會の上、該慰問の方法に付協議し

けり、今當日議決の趣きを聞くに、右慰問の趣旨を以て募集したる總金額は、三萬三千四百四十一圓五十六錢にして、同金額の利子は凡そ九百圓なり、右元利金額を合し之を戰死遺族六千四十五人に對し、菓子料として、一人に付金五圓宛を贈附する事とし、之に小松宮妃殿下の御眞筆なる(和歌一首)式紙一葉、及び「恩賜御寄贈並に有志人各調」一冊、並に各首唱者の慰問狀一通を添へ、小松宮別當高崎宮中顧問官より、各府縣知事に送達方を依賴することゝ定まりたり、同式紙は上長官以上の向へは絹地の中に扇子形を摸し、其上に旭に櫻花の散る摸樣ある者を用ひ、尉官の向へは鳥の子紙に、同樣の形及ひ摸樣ある者を用ひ、下士以下の向へは大形の式紙に、同樣の摸樣ある者を用ふる由にて、小松宮妃殿下の御歌は

敷島の大和心の櫻花
散ていよ／＼世にかはるらむ

を美しう染めさせられたるものと承る、又首唱者たる各貴婦人より贈るべき慰問狀は左の如し

謹啓仕候何　殿御事去る二十七八年の戰役に付ては身命を擲ち御國のため御盡力今日の如く國威を宇內に輝かされ候御誠忠の段實に萬古の龜鑑にして感銘の至りに堪へず候これによりて小松宮妃殿下を始め各宮妃殿下の令旨を体し名譽ある御遺族方を慰問可申上と存じ私共首唱者となり廣く同感の婦人を募り居候處畏くも其趣旨皇太后陛下の御聞に達し右の慰問資中へ金圓御下賜の榮を蒙り各宮妃殿下よりも亦御寄贈を添ふし且つ別冊の通り有志の婦人の贊同を得しに付小松宮妃賴子殿下の御詠歌を仰ふぎ謹みて御靈前に供へ聊か其忠魂を慰め參らせ些少なから別封御菓子料として貴家に贈進いたし候間御受納被下候はゝ本懷之に過ぎさることに奉存候右一同に代り私共より得貴意候　拜具

明治二十九年五月

外征軍隊死亡者遺族慰問婦人會

主唱者連名八十二人

某殿御遺族御中

●大山侯令嬢生前の光榮死後の紀念　大山侯爵の長女信子嬢は、兼て肺患に罹り、青山北町の別邸に醫療中の處、養生其効なく、遂に去る二十一日逝去せられたり。其數日前畏くも　皇后宮殿下には、其病篤きよしを聞し召され、御見舞として、紅白の御菓子並に金十五圓を下し賜ひしに、嬢は感泣の餘り起て之を拜謝し、臨終の際迄は恩賜の金品を枕頭に散置して、悦び居られしも、今は紀念となりしより、侯爵家にては、責めてもの心遣りに、嬢が生前尤も掛念せし事業に寄附せんとて、今回明治女學校建築費義捐の慈善部に向て寄附せられたりとなん、尚嬢の遺骸は、去廿四日神葬式にて青山墓地に埋葬せり、當日の會葬者は、野津大將樺山大將を始め、各陸海軍の將校、並に相當官等無慮八百餘名にして、頗る盛式なりしと。

●細川華族女學校長令嬢に按摩を敎ゆ　一夕細川華族女學校長を駿河臺の邸に訪ふ者ありしに、氏は奥まりたる閑室にて蒲團の上に横はり、左右には最愛の令嬢両人附添ひて、肩腰部など揉み撫りて居たりけり、客は病氣にもやと疑ひ、此頃の不順の時候に、御加減にても惡しきにやと問へど。否さる事なし、腰肩を揉ませるは毎夜の事なりと云ふに、客は驚き怪みつゝ、然らば其業の者を傭ひたまふこそ然るべけれ、重きものとては日傘と箸とより外持たせたまはぬ令嬢の御手を煩したまふまでもなかるべきに、御見受け申すさへ痛々しうこそと云へど。氏は斑白の鬚を撫りつゝ、両人の令嬢を顧みて温かき笑を洩しつ、されどよ、此には我心に思ふ節ありての事なり、お若い方には面白かるまじけれど、其仔細お話し申さん、曾て予が知れる人の娘に、容貌才藝何一つ欠けたることなきがありて、去る方に嫁ぎ夫婦間も睦まじかりしが、一年ばかり經ちて俄に離縁となりて實家に歸れり、何さ

ま深き事情なくては叶はじと、夫となく樣子を探りしに、其娘利發の生なれど、まだ年も若く舅姑に事ふること疎かりしやにて、日頃按摩の心得なき爲め、兎角兩親の機嫌に外れ、夫等の事より一家の和睦を欠きて、遂に行末望ある夫の家にも居惡く、斯の仕合せと解りしが、其後も薄倖なる娘が嘆きを、折々聞くにつけても、世に娘持ちし親ほど苦勞多きはなし、娘一人立派に育て上げて、學問行儀、女の道を仕込むこと、苟且の事にあらず、躾けし上にも躾け、敎ふる上にも敎へて、萬に落度なからしむること親たるものが大事の勤めなり、予も總領の娘はすでに嫁らせたれど、重荷半分卸せしほどに安心はせしもの丶、まだ跡には兩人の娘ありて、何卒今話した娘の樣な行末は見せたくなしと、片時案せぬ暇もなきは親心ぞかし、夫故家には下女もあれど、女の爲べき用事は必ず娘にも爲せ、又夜になれど恪は肩を揉ませて、按摩の稽古さするも、心掛て嫌な顏の半分も見せぬは、予に取りて如何ばかり嬉しがるべきと云さして、アハヽヽ到頭また例の講釋をお聞に入れて仕舞た、定めし難かしい爺とお思ひだらう…………

●百歲の老翁と子孫三十三人　山口縣佐波郡八坂村木村平藏氏の父甚吉と云へるは、本年滿百歲の老翁にして、幼時より病氣の爲め臥蓐せしことは稀にして、今尙ほ矍鑠として、老て益々壯なりの有樣は、村の若者を凌ぎ、元氣凛として百歲に至るも、眼鏡杖等を用ゐず、時には農業の補助をなすなど、近鄕近郡にはいと稀れなる老翁なるが、此程親族知己を招き、もヽとせの賀莚を張り、祝餠と共に、百歲賀佐波郡八坂村甚吉と書したる祝盃數百個を、各親族及知己に配附したりといふ、因に記す、翁は子五人孫十九人曾孫九人ありて、曾孫最年長者、本年十七歲なりと、隨分珍らしき長壽者といふ可し。

●老婆藍綬褒章を下賜せらる

福島縣岩代國耶麻郡喜多方村、瓜生祐次郎の養母瓜生いわ、といへるは、資性温良貞淑にして、勤儉を行ひ、施與を務め、明治戊辰の役後、會津地方の民窮し俗壞るを見て、之を賑濟救育せん爲に、幼學校を建てんと目計み、又自ら東京に來りて救貧の方法を講究し、歸りて貧兒養育所を私宅に、又救育所を福島町に設けたり、既にして近郡有志の囑托により、育兒會を創め、又自ら福島瓜生會を開きて窮乏を賑はす等、爲めに凍餓を免れたる者前後甚だ多し、或は飴粕を以て煎餅麵包を創製して救貧の一助と爲し、其他育兒慈善の事業に從事すること三十餘年一日の如く、洵に公衆の利益を興し、成績著明なりとの廉を以て、明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ、其善行を表彰されたり。

●貞婦米子　足曳の奥山にまさかりを荷ひ、葦の渚に藻草かく、れうな乙女に至るまで、目に文字をそなね、口に句讀を貯ふる今の世は、彼の智能開發と云ふことに於て、こよなうありかたき大御世と進んで喜ふ、そのうしろさまかへり見れば、わが國の礎となす可き、所謂德操節義なるもの丶、日は一日よりすたれ遠ざかる丶は一利の裏に伴ふ一害とやらの常とは云ひながら、心あらんもの丶、深く憂ふるふしとぞ聞へ侍る、折節聞見せまし、妾共いと〳〵目出度思ひ感ずる儘に、聊か、世の吹聽を實地に探り證して、大方の姫達にきこえ參らせんとする仔細は、玆處廣島の町外れ、蟹屋村に米子とて、ことし四十路あまり二年の齡をかぞふる内君あり、其が夫とかしつかる丶、増原收作ぬしは、長く銀行に職を執らる丶間、留守の家業の朝夕に、道に叶ひて能く整ふは、物の數かは何不足なき暮しにありても、夫にまゐらすもの丶一ッとて、召使杯の手にかけず、皆自ら調度せざるはなく、その上一里あまりの道のりを、千秋一日と、雪の朝、雨の日、脚も怠り

なく、手づから晝の食事を夫に送りはこびせられしも、萬一の粗末やあらんとの心遣ひに出るよし、聞さへ頼もしきに、わきて近比は夫が神經のさはりより、ふさぎ勝に日を送ることのいたく嘆かれて、神佛かけて、その本復を祈り、醫藥看護は素より盡さずと云ふことなき眞心も、時のめぐりは是非もなく、次第に募る病勢は、けふとなりては遂に一日の半ばを床に臥す悲しみ遣る方なく、せめてものうさはらしと、くす師の言ばを力くさに、彼處の公園此處の風致と、かよわき女性の、夫を手とり足とり、あるは負ひて連れまゐらせ、その面ばせの少しだに、冴ゆるを見て、嬉しき思ひせらるゝも、いぢらしく、時も時とて、夜の臥床に、蚊のおそひ來ては、皆人蚊帳の中に身をよくるこの比、かゝるいたづきのことゆゑ、夫のいとふ蚊帳をいぶせく嫌はれけれど、右に病人を撫で摩り左に團扇もてたすけあをちつゝ、片時夜具くつろげて休ひひまなくかれはらるゝ、沙汰の巷につたわりて、其心ばせの殊勝さ、今の世に多く得がたき貞婦かなど、己に土地の新聞紙も紹介なせるゆかりを、まわらぬ筆に物して、取次ぎいたし女の鑑の餘白を汚す賤の心中看る人よしなに推量あらまほしくこそ。　（保元音羽女寄稿）

●奇特の女子　山口縣より其孝貞を賞せられ賞與を受けたるもの左の如し

豐浦郡彦島村平民
植田長右衛門妻　いせ

資性溫厚齡二十にして植田長右衛門に歸嫁し、爾來舅姑に事へて一意孝養を盡し、夫を輔けて嫁業を勵み、能く貧困の家計を理し、又盲目なる義甥市五郎を愛憐する實子も啻ならざる等、其の志操を變せざる茲に四十余年、爲めに一家相親睦し、里人其の孝貞を稱す、洵に奇特とす仍て爲其賞金二圓を下賜候事

明治二十九年五月十五日　山口縣知事正五位勲二等

大浦兼武

●心の栞（つゞき）

然り而して、今の世動もすれば、我最愛なる女子に婚嫁を許すに當り、輕卒なる媒酌人の口を信じ、其人物の撰擇よりも、頓に其官資等の高きを先きにし、或は一時の甘言を食み、我の女子を進物同様の旨を以て人に許す、娶家も亦其德義薄くして、大切なる人の子を以て物品視するに至る、嗚呼道德の廢れたる歎ずるに餘り有りとす、女子にして能々玆に顧みる所なければ、いかにして世の通弊を匡す事を得ん乎。

抑、女子の世に處するや、逆境あり順境あり、順境は恒を守りて處す故に易し、其逆境に處するや艱難の中に其志を易へず、或は舅姑夫のため、家のため、子孫のため、辛苦を忍ぶん事も有るべきものを乎、されば其始めより、一度嫁きし家は吾の生涯の家にして、其の遭遇のため操を變ぜざるの決心をば呉々も離すべからず、此誠意を以てひたすら父母と協議を遂げ、然る后ち人の家に嫁ぎなば、恐らくはその誤ち尠かるべし、必ずや世の輕薄者流に倣ひて、以て自ら其の身をいやしめ辱むる事有へからず。

我惟ふに、世の女子、未だ悉く玆に心を用ゐる事尠かるべし、之れ蓋し、世の習慣の致す所と雖、今や日一日と改善に趣けり、されは成るたけ善に近より、事を行ひて以て世を補け、我身を修めゆくこそ眞の人の道とは云ふべけれ。

今將た、諸氏等の中、補習科を修めて教員に從事し給ふかた〱には、後の日を待ちて別に數々聞ゆべきふしもあるめれど、こゝに聊かいはんには、是より益進んで兒童教育に必要なることゞも熱心に修めて、其用意を充たしめ、而して后ち彼の體育、德育、智育

と相俟ちてこれを兒童に實施し、此時に當りては終始我れは兒童の師標ともなるものなれば、先以て已れの心を正しくし、其意を誠にして以て、其敎師たるの責を盡しねかし。必や、其任の重き事、豈輕々たるべきものならん哉。

明治二十九年三月

●甫守校長の談話　左の一篇は、彦根高等女學校長なる、甫守謹吾氏が同校の生徒の父母及保證人に向て、同校の敎育主義、幷びに同校と家庭との關係につき談話せられし大要の筆記なり。

御列席の紳士貴婦人諸君、本日は本校生徒の學術演習會を開くにつき、ご出席を請ひしに、諸君はご多用中にも拘らず、ご用務れ繰合の上、かくご盛にご來臨ありしは生徒の光榮なるのみならず、實に本校の面目とする所にして、予が深く謝する所なり、かく多數の諸君に、ご面會の上懇談をなすの榮を得ては、予が深く喜ぶ所にして、本日の如きご面會は、平素求めても容易に得難きの好機會なりと存ずれば、予は本校敎育の目的、幷に本校内に於て平素なしつゝある敎育法の實際を申述べ、併せて本校が諸君に希望する所を陳べ、以て諸君の淸聽を煩はさんとす。

一、本校　目的は、本校規則に明示せる如く、優良にして有用なる婦女を養成し、兼て敎職に從事せんとする者を養成するにあり、之を少しく詳に申せば、本校は我國固有の風俗習慣等に基きて女子の淑德を養成し、時世の要求に應じ女子に必要なる智識を授くるを以て敎育の主眼とし、傍ら小學校敎員、若くは幼稚園保姆志願者の爲めに必要なる學術を授くるを目的とす、即 尋常小學校卒業以上の女子に中等敎育を施し、女子の品位を高め、婦妻としてはよく夫及び舅姑に事へ、母としては子女の敎養を全ふし、主婦としてはよく家政を整理し家族を調和し、以て女子の本分を盡す

に足るべき身體の發達を謀り智德を啓發し、又教員志望の者には特に教育に關する學科を添課して、教育者たるに適當の資格を與ふるにあり、故に本校制定の學科を履修するものは、女子に必要なる智識技能を取得するに止まらず、亦教員保姆等の職業に從事することを得べし。

今茲に本校の目的を達するに必要なりと感ずる次第を申し述べんに、そは他にあらず、本校と生徒の父母及保證人たる諸君と、生徒教養上に關し其主義方法を一致せしむるにある事是なり、其譯は生徒が學校にある間は僅か五六時間にして、(多くも七時間)其五六時間も多くは學科教授に費すことになるにも拘らず、彼の教育上最も緊要なる德育上操行養成上の一點は、學校外にありて種々の事物に遭遇し刺衝せらるゝ間に、知らず識らず感染陶冶せらるゝ勢力の最大なるものなれば、此時間を適當の方法に使用する良法を與ふるにあらざれば、學校教育の目的は殆んど達し難きものなるが故、諸君に於て平素此時間を使用せしむる方法を、本校が執る所の主義方法に一致せしむる樣ご注意あらんことを希望す、言を換へて之を申せば、生徒をして學校内と學校外と同一の境遇ならしむることとなり、斯く申すも生徒たるもの、家庭にありては机案に向ひ書物の虫となり、學術をのみ勉强せしむるとの主意にはこれなく、只本校の主義方法に一致したる境遇にありて經過せしめられよと云ふ主情に外ならず、そは後に申述ぶる所にて自然にご了解あるならん、諸君は既に最愛なる良子女姉妹を本校に入學せしめられたるにつき、本校と諸君と主義方法を一致せしむることは極めて必要のことなりと存ずれど、今左に本校教育の主義に關する二三の條件を申述べ、生徒が學校外にあるときと雖も、學校内と同一の境遇にあらしめ、切角學校内にて薰染したる風習が學校外に出づれば忽ち消散す

るが如きことなきやう、呉々も希望致す次第なり。

一、元來敎育とは、人の身体及び精神を練磨して之を强壯にし、之を活潑にし、其發育成長を充分に遂げしめ、且人の爲めに或る目的を定めて、之に有用なる智識技藝を授くること是なり、されど敎育は廣き意味にては學問することのみにあらずして、一人前の人間即女子で申せど女子たる一人前の婦人に仕立つることを云ふなり。

一、本校の目的は前に申述べたる如く、優良にして有用なる婦女を養成し、兼て學校敎育に從事せんとする志願の女子には其必須の學科を敎授するにあれど、何程學術のみが上達するも操行修まらずんば、啻優等の生徒となすを得ざるのみならず、寧ろ本校の目的に違ひたるものと云はざるべからず、故に本校に於ては縱令學術は尋常なるも、操行善良なるものを第一に重んずの方針を執り、德育に於ては總ての點に一層の注意を加へて婦人たるの淑德を成就せしめんことを期せり。

一、本校に於て前項の目的を達せんが爲め、平素强く質素節儉勤勉の風を重じ、勉めて華美に流るゝの弊を避けんとするにより、生徒が日々出校する際用ゐる衣服頭髪の如きは容儀を正し健康を保つに足るを以て定度となせり、一體衣服頭髪の飾りの如きは其人の位置資産に相當すべきものにして一定すべきにあらざるも、學校の生徒としては務めて質素を主とし、華美の風習に染まざるやう注意すること最必要なり、縱令其材料は質素なるも縞柄摸樣などのはでにすぎたるは本校の生徒に不似合なることを承知せられたし、就ては人美の服裝頭髪等をなすものは、本校は其當人に注意して之を禁止せしむることにしたれど、諸君も其方針を以て、家庭に於て注意あらんことを希望す。

一、女子の體力は男子に比すれど軟弱なるのみなら

す、學問したる女子の病身なるは世間有り勝のことなれど、本校は深く生徒の體育則衛生上の諸件に注意し、諸種の方法を實行せしめ、遊戯體操等は正科として課し、勉めて之を奬勵するの方針を執り、以て身體を鍛錬し、併せて精神の强壮を謀り、煩劇なる文明の家庭及び國家に處する有爲の日本女子を養成するを期せり。

一、女子は諸種の習慣事情よりして、他人に依賴するの心强くして獨立心乏しきものなれど、本校敎育の主義は務めて自治の精神を强く養成するの方針を執り、其生徒の年齢と學科の程度とに應じて萬事自ら處理せしむるの方針に仕向くることゝせり、故に毎日各敎室の洒掃、生徒各自の頭髪、衣服其他の諸件を初め、諸學科の研究上に於ても此趣旨を以て生徒を敎養せり。

一、婦人たる者一たびは必ず人の妻となり、次には人の母となり又一家の主婦とならざるべからず、是れ自然に具る女子の役目なり、故に人の妻となりて後は直に其子を膝下に敎育する一大責任あるものなれど、縦令學校敎師とならざるも家庭にありて自然の敎師となるものなり、されば女子が育兒の方法に通曉するは極めて必要なることにして、世々賢母と稱せらるゝ程の者は皆其理法に通曉したるものに外ならず、本校に於て生徒一般に家事科中育兒法を研究せしむるは、畢竟其目的を達せんとするが爲めなり。

一、本校に於ては勉めて實用的即實地的の敎育を重んせり、故に學科中家事の如きは衣食住、金錢の出納に等に關する事項より、割烹、調理、家屋、洒掃、衛生養蠶、看病等に關する事項に至るまで、日常切實なることを敎授せり、されど生徒の家庭にある間は可成實地家事向に關係せしめて、室内洒掃向、手紙の認方、帳簿類の取扱、庖厨、裁縫、洗濯等の事に至るまで何呉れとなく便宜其事を見習はしめ、只一室に閉じ籠り

て讀書にのみ耽る等の弊風を生ぜざる樣にご注意あらんことを希望す。

一、世間には現今の風潮に誘はれ取捨の區別を誤りて一途に歐米の風に心醉する婦女子なきにあらざれども、そは最も考ふべきことなり、我國には我國に自ら適當したる善良の風習あれど、彼是相折衷し歐米の風にのみ偏せざるを可とす、さりとて本邦從來の風習も現今に適當せざることは勉めて之を改良し、所謂中正なる進歩的主義を執るは本校の職として勉むる所たることを了解せられたし。

一、本校に於て制定したる規則は、本校内に於ける一の憲法なれど、生徒には學校内に於て之を守らしむるのみならず、學校外に於ても勉めて其を遵守實行せしむることにご協力せられたし。

一、裁縫科は女子の學ぶべき藝能中最切要なるものなれど、本校は取りわけ其の敎へ方に力を用ひ、技藝專修科に於ては在學三ヶ年の間に、他の女子に必要なる學科を修めつゝ、裁ち縫ひ一通りのわざは充分なる熟練を得せしめ、一家の妻女として毫も耻づる所なきに至らしめんことを期せり、故に裁縫の材料に付き學校より生徒に命じたることは勉めて供給せられたし。

一、本校は裁縫科實地練習の爲め他の依賴に應じ　生徒に裁縫せしむるの方法を實施せり、故に依賴に應じて生徒が調製したる裁縫品は巧拙により等差を付け、普通の仕立料より幾分か減額して仕立賃を申し受け、之を生徒の貯金に充て、以て勤勉、節儉、貯蓄の精神を實地に養成するを主とせり。

一、本校は家政實習の一科として、生徒に料理法を實習せしめん爲めに種々の方法を設け、常式の料理は勿論、對客の料理法に至るまで凡て其心得あらしめんとせり、但當分は平常食事の仕度を利用し、献立、買物、煮炊の事まで親しく實地に稽古せしむる方法を立て

り、對客の料理は、時々賓客を本校の分敎室即家政實習所に招待して、其當日の當番生徒が料理せし食品を饗し、併せて客對の禮法をも實習せしむることゝせり。

一、茶道、生花、編物、圖畫、音樂等の隨意科に於ける諸學科は、實用の藝能を充分に實地に敎ふると共に優美温良の美德を養ひ、高尙閑雅の思想及情態を得せしめんが爲め、正科時間外に之を設け、志願の生徒をして（本校生徒外の者も志望者には隨意に某科を學習するを得）自由に學習せしむるの便利を與へ之を敎授することゝせり。

一、世間には女子を他人の家に托し置て學校に通はしむるものなきにあらず、これは自宅と學校と遠隔して、日々の通學に不便なるより生ずるものあるべけれど、一概に非難する譯には參らねども往々弊害の生じ易きものなれど、成る可く母親の手許に置きて通學せしめらるゝか、本校内に設けある寄宿舍内に寄宿せしめらるゝかの方針を執られんことを希望す。本校内の寄宿舍と申すは、女子に必要なる諸作法を習はしめ、兼て家事を實習せしむる場所に使用し居れど、其寄宿舍内の趣は、世間普通の家庭と少しも異なることなからしめんとて、二名の女敎員常に宿泊して、生徒と舍内に起居を倶にし、万事質素を主とし費用の如きも極めて少量を以て支辨することゝし、炊事、洗濯、理髮等皆舍内にありて實習せしむることゝせり。

一、本校に於ては生徒をして日常の事情に通せしめ、傍ら讀書作文等の應用力を養成せん爲め、學校新聞なるものを設け、日々校内の出來事を初め、世間の出來事に至るまで敎育上緊要の事項を編輯掲示して縱覽せしむることゝし、其編輯者は上級生を以て從事せしむることゝせり、其材料の如きも追々は日用品の見本等の實物をも掲示するの考案なれど、諸君に於ては家庭に於ての製造品なり、商品なり、反物の切端屑なり、

苟も本校生徒の學問上參考となるべき物品を寄贈あらば、一層生徒否本校の幸福なり。

一、生徒中病氣其他の事故に依り出校せざるときは、其旨必ず通知簿に記入せられたし、又出校するも半途より欠席せざるを得ざる事情あるときは、是亦右欠席を證明するに足る屆書を差出されたし、就ては通知簿にも記入なく、生徒自身に半途欠席を申出たるとき、敎育に於て確かなる理由なりと認むるに於ては固より許さゞるにはあらざれ共、其翌日、本人出校の節には必ず前日の半途欠席證明書を差出されたし、是等は今玆に改めて申述ぶるまでの事にもなけれ共、兎角等閑勝に流れ易く、且往々弊害の生じ易きものなり、故に本校に於ては勉めて鄭重に之を取扱ふの方針なれば、家庭に於ても其れ心せられたし。

（以下次號）

●東洋蠶新論　本書は、府下養蠶改良玉川社より出版せる者にして、著者は、即ち、社長新妻淸吉氏なり、本書固より一小冊子に過ぎざれども、記載の各項は著者十數年來の實驗を以て、蠶種撰擇、貯藏、收蠶等十餘章を分ちて詳述したれば、世の蠶業に從事する者一讀すれば、稗益あるや必せり、特に製糸工女の心得となるべき「一つとせい節」を卷尾に附したるなどは、用意のほど最と面白し。

（定價五十錢……發賣所　神田區西小川町二丁目九番地坂井菊太郎）

●看病の心得（平野鎰子編纂）　佐藤保氏の校閱に係る。看病の心得に付きいと審かに書き記されたるものなり、編者なる平野ぬしは、曾て東京慈惠病院の看護婦たりし人なれば、机上の空論を叩くものと違ひ、皆その實驗に依りて筆を採りたるものなりといふ。

（正價金貳拾錢……發行所　日本橋本町三丁目　博文舘）

社告

本社は今まで、諸方の姫たちよりおくらるゝ、兼題の歌文の、締切の期日までに、到着せしもの、中より、特にすぐれたるもの三四首を撰み出して、天地人の三才に配し、其の撰みに當り玉へる方々へは、それ〴〵定めの如く、（天三部、地二部 人一部宛）本誌をおくり參らせ、其の他はすべて、到着の順に紙上に掲ぐる例なりしが、近き比は、歌文の數いたく增りて、歌は常に、數百首に上るやうなりにたるに、今までの如く、僅かに三四首のみ撰み出さん定めにては、殆んど、同趣同巧にして、甲乙を定めがたきほどのものも、一は撰歌として、賞品を受くる上に特筆せられ、一は到着の順に、なみ〳〵の者の中に列ね記さるゝ事となりて、撰みにもれし人々の心にも、いかでかり悔しからんと、思ひやらるゝによりて、今よりは、天地人の外に、秀逸といふをおきて、三才の撰みにはもれたれども、なほ、並々のものにはすぐれたるものを拔き出でゝ、其の次に書し、その他をも從前のごとく、到着の順に從ひて、列ね記すべければ、この心を得て、今まで、撰みにもれ給ひし人々も、ふるひて詠み出でたまへかし。

なほ、添へて聞え參らする事は、かねて〳〵紙上に聞え參らせし如く、原稿は歌にまれ文にまれ、題ごとに別紙に書し、文字は鮮明に、仮名は萬葉仮名を用ひず、普通のもののみを用ひ、又、歌一首の上に、上の句の中に、二こゑの漢字二字を用ひ、下の句の中に、二こゑの漢字一字を用ひて、左の書式の如く認め、發行日より十日前に必ず、本社にいたりつく樣おくられたし、此の定めに違へるものは、すべて採用せざるべければ、よく心したまひてよ。

書式（用紙は半紙形にて、歌は一人二首に限る）

題

住所　姓名

初句……二句……三句……

四句……五句……

初句……二句……三句……

四句……五句……



六月五日兼題　梅雨霽

天　東京三田四國町二十二番地　師岡千代子

うれしくも五月雨晴ぬいさ今日は
　やほしてん友やとひみむ

地　東京本郷區西須賀町四番地　三浦とき子

けふはまだ雨間ならむと人とへと
　はるゝはうれしさみたれのそら

人　下野國足利町　川田孝子

おふちさく軒に日影の見へそめて
　いまろはれゆくさみたれのくも

秀逸　（十五首）

ふりつゝく五月の雨も晴れにけり
　ほめりし衣けさはほしてむ　平山ふさ子

五月雨のいふせかりつる空にいま
　山よりいつるつきをまつかな　仁井田とみ子

きのふまて降りつゞきたる梅雨も
　わかは涼しく今朝は晴れたり　松尾こと子

昨日までふりつゝきにし五月雨の
　けふはくまなく晴にけるかな　大谷津琴子

五月雨のしつくにひちしぬれ衣
　けふはほすへくなりにけるかな　名取正代子

なかぬわひしこゝろの雲も五月雨の
　空ともにもはれわたるかな　永井さい子

心地よく晴わたりけりつれ〳〵と
　ふりくらしたるさみたれのそら　降田植子

須磨の浦の汐くむあまや五月雨の
　はれしけふより袖ぬらすらむ　住山幾子

晴れぬれはろらも草木のいろなして
　みとりすゝしき五月雨のあと　土肥仙子

梅雨はおとなくはれておふちちる
　をかの庵にゆふ日さすなり　小町谷里江子

浮雲のひまころ見ゆれこのゆふへ
　やゝはれそむるさみたれの空　小町谷園子

めつらしく夕日の影のほの見えて
　雲とたえゆくさみたれのそら　眞鍋直子

きのふこそかぎりなりしか梅雨の
そらはみどりに朝日にはへり　田津木久子

降りつゞく五月の雨も晴れそめて　館脇ます子
田面の稲葉もいろまさりけり

五月やみ軒もくちんと見し雨の　池谷とみ子
はれてうれしき日の光りかな

（以下原稿到着順）

雨雲はいつち行きけむなつこだち　杉浦糸子
のこる露さへすゞしかりけり

五月雨のはれゆくあとは殊さらに　古矢かま子
庭の木すゑもいろまされる

五月雨の雲間も見えてゆふづきよ　甲斐優子
影もすゞしきなつのこのごろ

曇りもしまた晴れもしてこの頃の　今川かね子
五月雨そらのわかこゝろかな

なつ引の手ひきのいとの五月雨の　河野文子
空はれそめていりひさすなり

うき雲の行きかさなりし五月雨も　關千代子
いつしか晴るゝ今日のみそらか

軒はよりおちくる瀧の音たえて　關とら子
月にはれゆくさみだれのそら

夏山のみどりさやかに見えそめぬ　植木[illegible]
さみだれはるゝそらの日影に

いつしかに軒の五月雨おとたえて　小倉根しう子
そらに棚引くあめのうきくも

さはかりにいふせかりしを梅雨の　増田すゑ子
晴れてうれしく月を見るかな

梅の實もうみにうむてふ雨晴れて　佐々木千鶴子
そらいろ見するつきくさの花

身もともに濕りはてたる五月雨の　上條よし子
晴れて心もひらく空かな

打ちつゞき軒はいふせき五月の　百瀬八代子
けふを限りに晴れしうれしさ

梅雨の晴れてうれしくれもふらむ　百瀬かつ子
しほ汲む業も絶えしうらびと

五月雨のやゝ晴れゆきし雲間より　勝もゝ代子
たえ〴〵見ゆるつきの影かな

さみだれし軒はの雲も晴れ行きて　萩原しげる子
今朝見え初むる遠の山もと

つれ〴〵に窓の戸開きなかむれは　大溪繁子
いつしかつゆも晴にけるかな

をやみなくふりしきりたる梅雨の　大溪あさ子

いつこよりしも晴そめにけむ

きゝなれし軒のたまみつ音たえて　武田粲子
はれそめにけりさみたれの空

五月雨のふりくづしたる軒端より　鹽井粛代子
いまこそもるれありあけの月

たにふかく埋みし雲のすゑはれて　佐沼房子
木々の梢はみどり立たゝる

梅雨のけふの晴れ間のをりをえて　吾妻ちか子
まこもかるらん濱のさと人

つれ〳〵とふりくらしたる梅雨の　柳田さと子
はれても殘るのきのたまみつ

さみたれしのきの玉水たま〳〵に　内田冬子
はれて嬉しき日のひかりかな

しつか家ののきのしつくも月影の　諸井冬子
ひかりに見えてはるゝ五月雨

さみたれに海なす庭もこよひこそ　黑澤萩子
はれてさやかに月やとるらめ

五月雨のなこりのつゆにさす月を　大竹治子
ほたるとのみも思ひけるかな

五月雨はいつやみぬらんわか竹の　福木利家子
はすゑ涼しくつきそやとれる

梅雨はけふはれにけりいへことに　小森さだ子
しめりしころも今やほすらん

五月雨のひさしくふりし庭のもに　北村てい子
けふめつらしく夕日さすなり

五月雨のはれたる空のあさひかげ　北村孝子
けふはあふかぬ人なかりけり

五月雨のやむとしもなく見し雲の　小幡富代子
いつちゆきけん今朝そ晴たる

梅雨のはれし軒はにゆふ日かけ　山田ゑい子
さすもまむゆく見ゆる今日かな

きのまでふりしきりたる梅雨の　仁保基子
はれてすゞしき庭のたまさゝ

いぶせくもふりし五月雨晴にけり　田代艶子
なごりのつゆに夕日さしつゝ

いつしかとわひつゝまちし梅雨の　岡田よね子
はれてうれしきやまのはの月

たえまなくふりつゝきたる梅雨の　栗田口信子
いつしかはれし空のよきかな

をやみなき五月の雨もふりやみて　冬木わか子
けふは夕日にうつる富士の根

賤が女のかさにそゝきし五月雨の　三谷起美子

はれて田の面に夕日てるかな

雨はれてれのか五月もゑはしそと　羽田三緒子
蟬ふりたてゝなくほとゝきす

五月雨のふりつゝきたる雨はれて　河田いし子
人もほすらんぬれしころもを

植ゑわたすゑつか門田に雨はれて　川口政子
すけの小笠のかすそましゆく

五月ばれそのふの木々の白つゆに　島田悦子
うらめつらしく夕日さすなり

梅の實のうみはてし雨もこの朝け　佐々有鄰子
はれて冷しきかせのおとかな

五月雨にかきの卯の花くちぬれど　佐々小琴子
はれてすゞしき軒のゑたかせ

いく日ともふりつゞきたる梅雨の　北島切子
そらさりけなき三日月のかけ

うとかりし月日の影とさみたれの　北島松子
はれてまばゆくなりにける哉

めつらしく若葉かくれに月みねぬ　三笠嘉子
今はとはれしさみたれのそら

夕風にあふちかつちるこすゑより　有坂清子
五月雨はれて日かげさすなり

さみたれの雲まそもるゝ朝ひかげ　髙瀬孝子
みるこゝろさへ晴にけるかな

月かげも今霄はまさるこゝちせり　東條不二子
さみだれはるゝ雲のたえまに

花あふひけふこそ色はましにけれ　東條菊子
さみだれはれて夕日させれば

梅雨の霽れてうれしく野へ行けば　北村正枝子
はたくさ茂くそたちけるかな

始めあれば終りある代のことわりに　前澤幸子
たかはてはるゝ五月雨のそら

たれこめてかこちし梅雨の夕暮を　星野かづ子
風たのもしく晴れわたりけり

あら小田に鍬とる人もこのつゆの　星野仁子
はれしをさそやうれしかるらん

けふこそは梅雨もはれぬと諸人の　大海原芳子
とくれきいてゝ衣ほすらめ

いつの日かはれんと待ちし梅雨も　保元音羽子
今日心地よくはれわたりけり

憂きにうきを忍ひゑのひし梅雨の　青木春子
あとなくはれて夕月のさす

さみたれのはれてうれしく池水に　渡邊すけ子

すみわたりたる月をみるかな
八重雲は科戸のかせに吹きちりて　小池まさ子
くまも殘らすはれしさみたれ
をやみなくふる五月雨も竹の葉に　荻原ふみ子
つゆをのこしてはるゝ空かな
さみたれの空はれゆきて山のはに　卜藏義江子
れぼつかなくもきゝす鳴なり
菅の根のながくつゝきし五月雨の　卜藏時代代
空も今日ころはれわたりけれ
五月雨の雲もいつしか晴れゆきて　濱口弘子
のきのたまみづ音たえにけり
かきくもり空もこゝろも五月雨の　廣瀨きく子
はれて嬉しき今日にもあるかな
梅雨もやゝはれそめぬ今日よりや　横田すま子
むきかる賤のいとまなからん
ときのまにみなわさかまく山川の　澤邊清淑子
やかてあせゆく五月雨のあと
梅雨もなごりあとなく霽れゆきて　松島花枝子
たけまにさゆるつきの冷しき
をやみなく降りし梅雨けさはれて　櫛田よし子
遠やまかげのゆかしくも見ゆ

さみだれし野やまの雨も晴れそめて　上松きく子
ゆふ日に蟬のこゑとよむなり
さみたれの空ははれたり嬉しくも　久松勢伊子
こよいは月のかけをこそ見め
めつらしく朝日さすなり夜の程に　杉山かね子
はれわたりけむさみたれの空
梅雨のろらはれぬともしられけり　野中あさ子
さやかになれる琴のしらへに
梅の實のいろづくやどに五月雨は　住山せの子
日影をみせてけふそはれたる
五月雨のはれてうれしき山の端は　石川るゐ子
いつ見しまどの詠めなるらむ
月かけもれもひたえたるこの頃に　石川きん子
さみたれはるゝこよひ嬉しき
さみたれのはれて嬉しき庭れもの　石川たつ子
梅も心もうみしこのごろ
梅雨もいつしかはれてくも間もる　大島愛子
月かけすゝしのきのゆふかせ
さみたれの限りもみえて空はれし　町田鶴子
今霄のつきのかけそすゞしき
川水もいつしかすみてさみたれの　神田久子

空はみどりにけさそはれたる

涼しくも夕くれかけてふくかせに　青木繁子
晴れこそわたれさみたれのくも

おもしろき月夜となりて五月雨は　遠藤梅子
なごりなきまで晴にけるかな

ふく風に梅の實れつるこずゑより　町田しげ子
五月雨晴れて日かけさすなり

かさなれる雲端わかれて五月雨の　吉川國子
しづくのために月そくづれる

あぢさゐの花も色つくさみたれの　楠精子
はれて小蝶のつゆにやどれる

梅のみも雫とともに落ちはてゝ　島田好子
あめなごりなくはれし庭かな

さみたれに思ひたへたる月かけを　木村兼子
今宵は晴れしそらにみるかな

六月五日兼題　田植を見る　（天地人のほかは原稿到着順）

天　三田四國町二十二番地　師岡千代子

都にのみ住める身は、よろづにつけて田舎のみ戀しうて、たまさかに出てくる人々の物語きゝても、いつかはそののどけきさかひを訪ひてましと思ふほど、五月ばかり、とある山里にいたりぬ。折しも四方の田面は、あるは早苗をとり、或は田植うる時なりけり。數多の男女、同じよそひにうちならび、諸ごゑに歌うたひつゝ、植ゑてはく後さまにしろきにしぞきゆくさま、何處もいづこも全やうなるが、定めなき此頃の空のならひとて、あるはくもり、あるは晴れ、あるは降りいづるなどするも厭はず、いそしむさま、いと〳〵めづらしくもをかしくて、母上にも姉上にも見せまつらまほしうなむ。はた苗をはこぶとて走り行くちご、晝餉たづさへて來る少女、引田の水をおとし居る賤の男などの樣、みやこにて畵にのみ見たりしにはまさりて、こよなくおもしろし。あはれ今よりかくいそしめは、秋のみのりもいかばかり豐けからましかの粒々皆辛苦とは、實にうべなりけりといと尊し、さはれ年頃心にかけつる田植のさま、親しく見つることのうれしくめづらしさに、植ゑのこれる早苗の露のかごとばかりをかくなむ。

地　鹿兒島市加治屋町三十二番戸　今藤なか子

彌生の春は夢なれや、またゝくひまに過ぎ去りて、若葉のかげなつかしき頃ともなれりしかは、田の面のさなへも時を得かほに、あを〳〵とおひしげりてうつしうゑべくなりぬ。

時しも、ふりみふらずみ、さみだれの最なかなれど、此期をすごさじとや、たがやしのわざする人々は、われ先にと田の面に出でゝ、苗うつすめり、あまたの男女たち、深田に足を踏みこみて、ふし面白きうたうたひつゝ、苗うつすあれど、腰にあづさ弓はりしれくなは、うまで負ひつゝ、苗代運ぶなど、いとをかしきさまなりや。されど、かの人々のくるしみは如何むかりぞや、雨にをかされ、照る日にやかれて、うきをかさね、つらきをしのび、幾ろたびあらんかぎりの苦勞して、うつせみの世の人々の、玉の緒をつなぐなるたなつものをつくりいかすなり、さるを、世には朝夕に美衣美食にあきはてゝ、なほ足らずとなすやからあり、あはれかれらに、このさまをゆめになりとも知らせまほしきや。

人

播摩龍野　眞鍋直子

小田近ういはしめたる友の許より、今日ころ田植のまさかりならめとて、迎への人れこせしにともなはれて行けは、けに今や最中なるらん、見渡す限り、いつこの田面も、いとあまた田子の出てて、水せきいるゝあるは、また牛の追つなとりて、すきかへさするもありて、其いたつきの程も身にしみて思ひやらるゝに、門の田は今や植ゑかゝるならん、早苗草になひてくれば、少女のともいつたりむたり、おなしやうなる菅笠うちきて、ふしれもれなしあかきたすきかけ、うきにをりたちて、ふしれもしろう田歌うたひ、なれしわさとて、いと手はやう、見るか中に、「はや一區は植ゑはてゝ、また次の田にとうつり行くいとおかし、かなたには親子にやあらん、はらからにやあらん、また老たるもあれは、若きも打まじりて、いとむつましけに語らひつつ、植うるさまもいとゆかしう、かくうしと思ふさまもなけに植ゑ渡すを見て、われもともに植ゑ見まほしき心地のするも、ろのさまのいと賑はしう興ありけなれはならんかし。

土肥仙子

きのふけふ、さみだれの、降りみ降らすみ、いとさためなきに、志はしの晴れまを待ちゐて、ちかき里の友をたつねんものと、行く路のかたへの田の面に、つまをりかさとかいふらむ笠をかゝむり、腰うちかゝめて、何をかものするさまあれは、ちかよりて見るに、しつの女たちの、苗植ゑつくるとて、いみしきわかなへを手につかねもて、れの〳〵いとたくみにうゑさしなから、田うたうたひて、はしめのほとは、三つよつ五つと、かそふはかりなりしも、はけみいとなむままに、やかて青葉のに

しきを、しきならへしてとくにゐなりにける、かゝるを、見すくさんもあかぬ心地して、時のうつり行くをも覺えす立てるほとに、ともなへる人の中には、このをみなともに、ものいひかくるもあれは、何心なく、すがたにも似つかぬこわねして、かた言ましりにいらへするなど、さすがにゝくからず、なかゝゝに興ありて、みやこにはおほえぬたのしさ、いふはかりなく、いとおもしろくなんありける、友だちのひとりが、まめだちて、けに〱しくいふやう、そもこのはしめは、かたちも見はかぬほとの、たねまきしより、かくわか苗になるまでも、おろかならさるに、剰へかやうにやすからぬすかたに、いそしみはげみ、植ゑつけてよりは、又朝な夕なに、水そゝき草とりなと、さま〲にいたつきおほくたてつゝ、穂に出でぬれは、虫つきあるは風吹んことをおそれ、明くれに思ひをそゝき、心をつくしてころ、ついには人のいのちをつなく、米といふ物にはなれ、よろづの事も、實にかくなんあるべき、されはわらはたちも、この苗のことく、はくゝまれし、たらちねの親親の、ふかきめくみを、片時もわするましきなりなと、かたりあひつゝ、かたへの柳のかげに立ちよれは、吹きよる風のけはひ、蛙のなくこゑも、をかしきに、心もゆきて、「うたのね行くさとにはつりてみちすから田の面にこゝろとまるけふかな」と口すさみつゝ、うち興するうちに、いつしか日もかたふきて、夕へをつくるかねの音、遠くきこゆるなと、何となう心はそう覺えけれは、あかぬものから、こゝろをのこして立かへりぬ。

三谷起美

去る者は日々に疎しいならひにや、同じ學びの屋に通ひたりし頃は、かたみに文の上の事など、くまなくかたらひし友垣も程ふるまゝに疎うなりゆくを、五月雨などつれ〲と降りくらして、心むすほるゝに、ふりはへてもとはましとて出で立つ新橋より滊車に乗るに、かりそめなれど、なれぬ旅とて、いと心もとなし、窓よりながめ出せど、しめやかに降る五月雨に、簑笠もそほぬれつゝ、遙あなたなる山の麓なる苗代より古びたる籠に早苗一はた取り入れて持ち來るかと思へど、忽ち飛ひ入りて、膝のあたりまで泥にまみれつゝ植ゑつけては上りくるを見れど、怪しき虫ども、足に吸ひつき、血しほに染みなどす、ひるなどいふものにや恐しとも恐し、十ばかりなる少女なども、さながら倦めるけしきもなくて、降る雨を天のめくみと喜びつゝ、おどろ〲しく過ぐる汽車の音にあからめもせで、おの

がじゝ巧を爭ふさま、もろこしの桑つみし女もかくやと思ふばかりなり、やがて一人立ち二人去り、俗歌に田舍の風景をましたる田の面も、玄づまりては又聲なく、天地寂漠として、只汽車の音のみひとり高し、思へば畫げの用意に歸りしならむ、止まりても見まほしけれど、さりとてこゝにて下るべきにあらねど、今は半ば植ゑつけられたる田の面をながめつゝ思ひめぐらすに、かく田舍人の朝な夕なに汗水を注ぎしいさをは、秋刈られて白き米となり、あまねき國民は、これによりて命を保つにこそ、あはれ一文字をだにしらぬ賤が女も、皆ろのつとめを守りて、公の益をなすものを、あけくれ學びの庭にありて、文の道をたどるおのれ等、いかで空しく尊き月日を費さるへき、一日片時もゆるかせにせず、行末は世のかゞみともなりなむ事を、心にかけて、螢に雪につとめはげむまむなど、よしなきことに時をうつすに、いつしか横濱へつきにけむ人々のさわぐけはひす、あゝ滊車は早きものかな。

今川かね子

凡そ世の中のことゞもは、何事にまれ、勞せずして成るものはあらざるべし、巳れ學校の試驗もすみて、十日あまり四日の休日を、こよなき折りと、友人某の君とうちかたらひて、ま近き田舍へたびたちぬ、折りしも春の花はなごりなくちり果てゝ、たゞ一面に青葉の色のいやましに綠をそひ、田植時の眞盛りとて、男女老幼、みなうちまじりて、あるは馬ひきつれて、田などかき平らすもあれど、我れ遲れじと競ひがほに、秧を挿むもあり、あるは諸手に苗持ちながら、畔傳にひなうたなどうたふもありて、いともたのしげに見ゑたり、されど秋の實のりを待つ、彼等の心根は如何にかと推しやれど、我等とても秋を待つ農夫とゆめたがはじなどゝ、巳が行方をもろゞろに思ひ出だされて、たのしくもまたこゝろぐるしくてなん。

佐々有鄰子

五月雨をやみなく、さとの中川水かさまさりて、くろうにこりたるを、馬ひきいれて、賤の男がうちわたるに、賤の女は、苗籠荷ひて、あとよりはぎもあらはにわたり行くさまは、田舍びたれど、御年の神の守りたまへる八束足穗の秋をいのりて、新嘗の忌庭にろなへ奉らんと、老若とりどりに、心つくして、山田のはらをばかもゝにひぢかきよせ、手なひぢに水なはかきたり、植ゑわたす富草の早苗は、久方の天の原にかよひて、青く、茂り行く大御代とひとしくみつみつしく、水穗の

國の名にかなひて、見わたすかぎりうるはしく、露の玉ちるさまは、ことにも筆にも及びがたうなん。

北村貞子

百聞は一見にしかずとの諺は、何事につけても思ひあたる節多けれど、妾幼きより、ちまたにのみ人となり、春は花見に、秋は紅葉狩に浮きたる心の道すから、なほざりにのみ見やりし田の面も、ゆゑありて去年の秋の半、始めて田舍に移り、さま〳〵なる百姓の働きをみて、其丹誠のなみ〳〵ならぬを身にしみて覺え、又今更のやうに此諺を思ひ出しぬ。さるに月日にせきもりなく、淋し〳〵とつぶやく間に、蛙の聲の友となり、はや五月の末つかたよりは、賤の男女の聲に賑はしくなりけることそうれしけれ、ある日賤がめのそば近く行きて、其かする業を親しくみるに、早苗とる手もかひかひしく、泥にまみれ日にさらされて、田植をなすに他念なし、かゝる人は、朝は星をいたゞきて外に出で、夕はかたへの草むらに螢の燈をみて家に歸るなど、今まのあたりみるにつけ、今更粒々辛苦てふ詞をさとり、又百姓の艱苦を深く意にとむる事とはなりぬ、されば風はげしき夜なとは、兎角植ゑ付けし苗の、傷はるゝ事はなきかと掌ほとの田を持たぬ身にも、いとも〳〵

打案せられてたゞ豐かにみのるやう、神に佛に祈るも、かの百姓の心を思ふあまりにぞありける。

北村孝子

世の人者の、一日も欠くへからさるものは米にこそありけれ、そが本は、中々に賤が人々の艱苦をしてなるなり、妾都にのみ生ひたちて、其の田植てふ業は、小山田のむくつけき男の、いとなみとのみ心得しに、そが多くは、賤の女の手業なりと始めて聞きて、妾も一度は見まほしやと思ひて、伯母なる人の、田舍にれはすれは、そが家へ行きて、宿近きあたりの田うゑを見しに、賤の女は、をちこちに打ちむれて、身には白赤などのたすきをまとひ、頭には日の光をさくるため大なるすげの笠をうちきて、いと身がるに裝ひて、腰のあたりまで泥に沒りて、早苗を取りては植ゑ、取りては植ゑ付け、又中にも少女子か、おもけに早苗取りて、そが婦と見ゆる者に、其業を敎へらるゝさま、いとも愛らしく、折から空の景色かはり、村雲まよび雨さへ降りきぬるに、何のいとひもなくて、夕くれかけて何のあやめもみわかぬまて立働くさまを見て、あはれ女の身にして、かゝる業する事よと感じたるまゝ都なる友にも見せまほしくてなん。

大竹治子

このほと、さりかたきことありて、田舍にものしける、ころしも田植時にて、わかき男女の、きよらなる單衣に、紅青白なとのたすきあやとり、各、帝國萬歲なとそめいたせる手拭もて頭をつゝみ、ゆたかなる君か御代をことほきつゝうたひのゝしりて早苗とるもあり、つかねたるをになひありくもあり、あるは三人四たり打そろひてうゑわたすなと、いと／＼おもしろく、みのりゆたけき秋のさまさへ、おもひやられぬ、あはれ我がみつほの國は、農業をもてもとゝし、そか中にも、米はかけまくも畏きあたりより、賤の者ともにいたるまて、皆こをもて生活し得るものなれはいと／＼ありかたくたふときものになん、されは御國の民草たるもの、よく／＼心して、つちかひやしなひ、おほきか上にも猶おほくのとり入れをなし、ます／＼御國をゆたかならしめん事をねかはてやはあるへき。

うゑ渡すちまちのさなへおほきみの
めくみのつゆにいろやそふらん

植木鋼子

五月雨のけふはすこしく晴間と思はるゝに、ふしをかしき節うたのきこゆるは、さてはとめ付き、外に出でかなたのうたふ聲をしるべに、行きてみれど、打渡す千町の小田に、今や早苗を已がとり／＼植うるにぞ有ける、男は束ねし苗を荷ひ、細きあせ道傳ひて、そここゝ便りよからんあたりに運び行けど、妹は小笠かたふけ、ぬるゝもすそをかゝげて、ひめもすのつかれをうたにはげまし、われ人に劣らじと、夕暮近く彌急ぎて、つゆもたゆむけしきなし、かくても猶幾月日の間、數多度草をぬきとり、雨に風に心を痛め、いとなき業に艱難を經てこそ、秋の田のみは心の儘なるべけれ、我等初學のもの、やがてこの田植のさまにも例ひて勉めなむ、他日の望み又違ふまじをと思ひやられぬ。

田津木久子

田子のいたつきの程は、人みないふめれど、なほかくしたしう其わざを見てこそ、其いたつきのほども思ひやらるれ。此頃は其の植ゑしほの時來ぬとて、昨日かもむぎかりとりし田面も、はやけふは見渡す限りみなすきかへして、老たるも若きも打まじりつゝ、ひちりこかきたり、泥水にひたり立ちて、ひるとかいふなる虫にすはれ、あしなどもいとうはれて、ちの出るもいとはず、裳のすそ袂のぬるゝもうしといとふさまもなく、田植うたいとをかしげにうたひつれて、植ゑわたすさ

まを見るにつけては、巳が職業とて、かくも身の勞を忘れいそしむ人の上の思ひやられて、巳れらのごとく、なす事もなう、遊びがちに、あたら月日を過す身の、いと〳〵はずかしくてなん、

名取正代

ふりつゞきぬる五月雨の空、いつはれぬべしとも見えず、軒の雫草木の露、見るものいづれもしめやかならざるなく、いとつれ〴〵なるまゝに、一日田舍の友たちがりとふらはんとていでゆきぬ、同じ心にやありけん、かゝるいふせき折、いかで訪ふ人もがなど思ひつるに、よくこそ來にけれど、いとよろこでむしげなり、かくてくさ〴〵の物語しつゝ、ふと外の方を見やれど、幾千町の田の面は、目も遙に見渡さるゝに、男をみな打まじらひ、もすそみじかく打かゝげて、あやしき田うたをうたひつゝ、玉苗植ゑわたす樣、いとにぎやかなり、げに梅雨の晴間もまたで、おのがじくかくいろしみいたつくも、ひとへに秋のみのりをたのみてなり、秋のみのり豐なるは、すなはち君の御爲國の爲にて、民のかまどもにぎはひぬべし、おのれらいかで此田子等がからうしてつくりしいねを、いたつらにうまゐしてもとめ食ひつゝ、雨のあした風の夕をいとひ、はたけふ

はつれ〴〵なり、けふは云々なりなどいひてありなんや、と、怠りの心うちけたれ、はやう暮れぬ間に歸りて、あすのいとなみを、いざとていとまをつけぬ。

北島切子

つれ〴〵のあまり、柴の戸たち出てゝ、むかひの田つら見渡せば、今日をはれにときかされる、またうら若きさ少女か、赤き玉たすきかけなして、すげ笠一樣に裝り、唄ふ田歌も一節に、あせのたま苗とり〳〵に、植うる手ぶりの面白さ、何にたとへんやうもなく、げに豐なる大御代の御しるしとてそあをがれて、またなくいともうれしくてなん、さはあれ巳か手業の成る迄は、朝の雨にぬれ夕の風にをかされて、いみいとふことなき少女等は、これなむ大君の御爲とはいへ、吾々は、日々此人々のめぐみの下にうるはひつるかと思へど、かりそめに見すぐすべくもあらずなむ。

牧野貞子

けふなん五月雨の雲間みえそめて、朝日影田つらにさせば、めづらしく嬉しとや思ふらん、打ちつれて馬をひき牛を逐ふ男子らあれど賤が女らは、けふを晴とや節をかしき歌うたひつゝ、一樣にすげの笠うちきて、赤きたすきをかけたるが、手足などあらはに出して、苗

植うる様、手なれたる事とはいへ、其のとき事あやしまるゝ計りなり、かくてうゑをへたる田の面は、かの碁盤にも似て、位置の正しくならびたるは、そが心ばへさへしのばれてゆかしうなむ。げに我國たみの、束の間も欠きうべからぬ日常品と仰がるゝ米穀は、みなこの賤が男賤が女のうゑつる苗より、大方の用に供するまで、いひ知らぬ勞を重ぬるにて、その貴さ、たとふるに物もなし、かくてかれはたゞ秋の收獲を樂しむばかりに、さばかりにくるしみをつとむるなりけり、あはれわれらが學の道にあるも、これに等しく、はげみ務みて艱苦をつまずば、よきしるしは見えじと、今そがまのあたりにて思ふまゝをかくこそ、

北島松子

いとしめやかに降り續きし五月雨の、今朝なごりなく晴れ渡り、庭の小鳥の百囀りもをかしく、心地なにとのうすがすがしければ、すゞろあるきせばやと思ふ心しきりなりければ、そこはかとなく家を出て、四方の露ふかき草木の茂れるを見ては、天地の惠を思ひ、咲き殘るすみれたんぽの花に、小蝶の戯るゝもゆかしく、ゆくとしもなく玉子村の邊につきぬ、折から節面白く田歌唄ふ聲の、里なれぬ妾か耳には珍らかなれば、ふと見かへれば、賤の女かあかきたすきあやなし、すきつかへしつ早苗とるなりけり、實に思へは、夙にあかつきの星をいたゞき、夕には小笠の上に月宿るまで、玉の汗ながしいそしむは、誰かためぞや、君のためとはいへ、吾等も此人々のめぐみを受くるなりけり、とは知らでありしにはあらねば、今まのあたり見ては、今更に粒々辛苦の程こそ思はるれ、顧みれは、腑甲斐なき此身、人並々に生れ來て、君のため世のため何のなし得し事もなき、里の少女子等にも劣りて恥かしく悔しき事になむ、あはれ一かどのわざをなし果したしなどおもひつゞけつゝ、まじろぎもせず見てありしに、夕をいそぐ鳥の聲に驚けば日もいつしか西に傾き、入相告ぐる鐘の音の身に染み、歸路のいそがれければ、家路につきぬ。

降田まき子

田舍にすめる友より、早苗とる頃となりぬと云ひこしたる言の葉、いとなつかしく、今日しも少しのいとまを得たれば、そが許を驚しけるに、降りつゞき居たる五月雨の今日晴れ渡りたれば、こゝかしこの小田に、水せき入れて、老も若きも男も女も、ひとしく菅の小笠をいたゞき、たすきあやとりて、田植歌とやらんをうた

ひの丶しりつ丶、早苗とる樣、田舍の景色見しらぬ目には、いと面白くめづらしう覺えぬ。さて今はさまでからきわざとしも見えねど、これより後は、雨の夕風の朝とたゆみなく、肌をこがす夏の暑もいとはで、或は田草をとり、或は肥を入れ、水を注ぐなど、ひたすらそが生ひたちをのみいのり、やがて秋風そよぎて、穗の出づる頃となれど、長き夜すがら露にぬれつゝ、そを守るなど、安き心とては一日だになく、そのくるしみやいかならん、こを思はゞ、一粒の米なりとて、ゆめゆめおろそかに思ふべきやは、これぞみ國人の命の種なるものをなど思ひつゞけ、しばし見ゐたるが、おもはずも、時の移りければ、やがて歸りぬ。

わかるゝ戀　　渡邊しげ子

千代の松原千代かけて、
契りし中も嵐吹く、
唐野にむかふ君なれは、
またあふをりはいつの世ぞ、
國と君とのみためには、
命を捨つるものゝふと、
覺悟は兼てせしものゝ、
今や別れとなりぬれは、
とやせんかくと胸のうち、
亂れてしげきわが涙、
あはれいく度しぼるとも、
名殘はいかて尽きぬべき、
いさ〳〵さらそさらはとて、
門べを出つるれも影も、
いつしか消えて有明けの、
月のみ袖に宿るなり、

花下言志　　名取正代子

みな人にめてはやさるゝさくら花
わか身のうへもかからましかは

奈良義成妹　　小町谷里江子

淵は瀬とよしかはるともあすか川
さろふ水にはいかてよるへき

古郷菫　　仝人

我が植ゑしもとのかきねも今はたれ
ゑめてすみれの花を見るらん

初めて女鑑をよみて　　影山やま子

女鑑てふ世にもまれなる敎へくさ
知らてすごしゝ事のかなしさ

小學敎員の勞を謝して　平澤ふさ子
なでしこの生ひ立つみても思ふかな
日毎〳〵のこゝろつくしを

野遊　有坂清子
花はゑみ柳はなびくはるの野に
こゝろひかれて今日もきにけり

新樹　近藤秀子
ふる雨にわかはのみどり色そひて
花にもまさるながめなりけり

嶺新樹　牧野定子
うすくこく色さま〳〵に繁りあふ
みねの若葉のおもしろきかな

餘花　仝人
たちならふ松のときはに習ひてや
なほさきのこるやまさくら花

都時鳥　牧野貞子
玉しきの都にいてしほとゝぎす
聲もいつしかあらたまりけり

水鶏　小町谷里江子
轉寢のゆめもむすはぬみじか夜に
あけぬとつけて鳴くくひな哉

水邊螢　仝人
ゆふへ〳〵なにを螢のおもひ川
おもひみだれてよをわたるらん

あはれ靜子　奥原ふく子

妾に一人の姪あり、靜子といふ、今年やう〳〵六歳の春を迎へて、蕾の花のうるはしく凹めるゑみに、玉の光りをたゝへ、太りたる頬に、ゑくぼの浪をたゝよはしつゝ、睦み戯るゝさま、なつかしく、朝な〳〵學校に通ふ折りには、子守兒の脊より、愛らしき眼もて見をくり、夕へに歸れは出迎ふるさまのゆかしき、何にかはたとへつへき、實にや兄上嫂きみの、掌中の玉も啻ならす愛てたまふも理りそかし、

垣根の梅も綻ひて、野邊の若草も萌ゑそむる頃、ふと彼は風邪に冒されて、呼吸になやめる樣なりき、左程にはあらしと打すておきしに、日を追うて重りゆく樣なりけれは、醫師を迎へて診察を請ひしに、コハ流行のヂフテリヤなりといふ、兄うへは痛くおどろきたまひ、電報もて血清藥を松江病院にとらせて、直ちに治療にとりかゝらしめ玉ひぬ、傳染病のことなれは、妾等は隣家に引きうつることゝなりぬ、もとより醫療と

息りなしといへとも、ジフテリヤは小兒の難症ときゝつれは、いたく心にかゝりて、其夜は得まとろます明しぬ、翌日學校にゆきしに、授業も身につかす、課業を終るや否や歸宅したれとも、出て迎ふるかれを見さるのみならす、聲たに聞くことを得さりければ、いとゝふさき勝にうちくらしぬ、あくるあしたに至りて、彼の病やゝ輕快に赴きぬとの知らせありければ、はしめて稍々心を安んしたり、これよりかれは日に日に輕くなりゆきければ、今はれそるゝに足らすと、皆　安堵して、やかて兄上は蠶絲業組合會議に列席せん爲出松し玉ひ、嫂は實母の病氣危篤なりとの報に接して、靜子をは母上に托して、實家なる大津に赴きましぬ、かくて數日をへて歸りまししに、靜子ははや室内をかけ廻り、くさ〳〵のものなと請ひ求むるに至りぬ、こを見たまひし嫂きみの喜ひは如何にやありけん、されは明日は全治届を出さんと、醫師の勸めによりて、浴みなとせしめしに、其夜より俄かに發熱はけしくなりぬ、醫師もいたく驚きて、感冒ならん、衰弱の後なれは、心すへしとて、注意をさ〳〵怠りなかりしも、かれのいたつきはいよ〳〵重くなりぬ、母上の膝を枕に、あるは嫂きみの腕をかたしきて、頭を右に左にうち廻しつゝ、苦しき呼吸の下に、玉の緒もあはれたゑなんさかへ、目もあてられす、醫師も今は施すへき術なく、電報もて兄上に急報することとなりぬ、あはれ兄上出松の折は、かれかいたつきも輕快に赴きたれは、こたひ歸宅の節は、かれはいと愛らしき笑顔もて、父上と出て迎ふるならんと期し玉ひしならん、さるにはからさりき、またかゝるあさましき樣を見んとは、兄上の夜をこめて急きにいそき歸りましゝ時は、はや靜子の呼吸はいよいよ急に、命も旦夕に迫れる時なりき、あゝ兄上のかなしみは、ろれ如何なりしそや、あはれ兄上の靜子とよひ玉ひし時、かれはよくこを解したりや否や、この日、妾は學校にありしに、午后二時すくるころ、校僕の通知によりて、靜子の危篤なるを知りぬ、さてはと、取るものもとりあへす歸宅せしに、家の内何となう靜まり愁をおびたり、いふかしみつゝ、病室に入れは、一同うちつとひたまひぬ、見れは靜子は母上の膝を枕にして横たはりぬ、如何なる夢か結ふらん、眼をとちて、只折々咽喉のあたりをうこかすのみ、肥ゑ太りたる昔のれもかけは早うせて、色青白くなりゆきぬ、かくするほとに、事たゑぬとて、嫂き母上うへはしめ、聲をあけて泣き玉ふ、妾もいとたへかたく、前后もしらす

泣き伏しぬ、其夜は夢路を辿る心地して、かれが側になき明しぬ、翌日になりて、靜子は花やかなる小さき棺の内に納められ、あまたの人々におくられて、涙と共に菩提寺にはこばれぬ、あはれを告ぐる僧侶の讀經の聲は、無常のかねの音に和して、かれは苔滑かなる祖先の墓碑の傍らに埋められぬ、かれは今や慈愛ふかき祖先の膝下にありて、永久に歸ることなかるへし、されと妾はいかにしても、かく信すること能はさるなり、かれか眠りのさむる時あるを信してうたかはさるなり、何となれは、かれかうるはしきおもかけの、今なほまほろしに殘りて忘るゝこと能はされはなり。

撰者曰

實情を寫し得てよむ人をして共に涙にむせばしむ

紅梅の花笠

佐々小琴子

熊本縣。肥後國。菊池郡。城北村立。松尾尋常小學校の定期の試業卒ぬれ、しばしの休日をゐて、福岡縣にあそびせんと、明治の廿九年の三月の廿九日、梅藥軒を立ちいづ。

あけぼのゝ赤きひかりはくれなゐの
　こぞめのうめのにほひたへけり

今をさかりの紅梅の花の

州鐵道植木驛の上り車の滊笛一聲黑煙のうちに高瀬川の鐵橋をわたりすぎぬ、筑紫潟海原とほくこがれくる滊船は、陸路の車と競ひてはしるがごとく、いと興ある見ものなりしが、三池の石炭穴の煙は、風上より棚引きかかりけり、

とりどりのけぶりの末ははるの野の
　みはたしひろきかすみとぞなる

二日市驛より滊車を下りて、御笠郡。官幣社。太宰府神社に詣づる途中に、大神の古跡。榎木とかいへる神社あり、拜みて太宰府町の旅館につき、衣裳を更め、拜殿に八拍手うちならして、

さきにほふ梅のはなかささしかさし
　いのりいのるはをしへ兒のため

神苑の景色記すべきことあまたあれども、筆さしおきぬ、

三十日旅館を朝とく立ちて、人力車より竈門神社に詣でんとて行くに、名にしおふ竈門の高山なれば、麓の地に車を駐めて數十町の坂路を杖にすがり登りつきぬ、昨年。官幣社に昇格仰出されたる延喜式内の神社なり、山上より筑前海をみわたして、

　　　　　　　　　かみの御くにはしづかなりけり

雨雲ふかく立ちぬれど、麓をさしていそぎ、駐めれきし車より博多驛につき、今夜よりは、福岡市のゆかりの家を旅館にさだめぬ、

三十一日ゆかりの人等と、博多驛より滊車にて、宗像郡。宗像神社に詣づ、官幣社なれどいとかうがうし、社務所に音なひ、沖の島の神社に船のたよりあらど詣でたきむねをこひつれど、みだりに詣づることをゆるさず、神掟をまもり風まちして出船することとなり、二日三日此地にあらねど出きうまじとの、神職のこたへにより、さることならどと立ちいでぬ、滊車にははじめ下りし赤間驛よりのりて、香椎驛にいたり、糟屋郡。官幣社。香椎宮に詣奉り、神のおや杉の下陰にしどしやすらひ、名島城趾にのぼり、多々良川を舟より渡り、那珂郡。官幣社。筥崎宮に詣づ、敵國降伏　醍醐天皇の宸筆は、神門の額にかけられたり、

　　筥ざきのなみまつどらによるなみの

と口すさめど、ゆかりの繁子が、言下に

　　あだふきはらふれきのしはかぜ

文永。弘安の蒙古。襲來のありさま、心にやうかび出でぬらん、いとをかし、夕日の影ふみて、やどにかへりつきしは、燈火かかげて、侍女どもがまち迎ふるころなりき、

四月一日早良郡。七隈の贈從三位。菊池武時卿の墳墓をさしてゆく、道の菜花には胡蝶舞ひ、薑床には雲雀聲たてゝ、元弘三年の春を弔ふことあやしまる、墳墓をふし拜みて、

　　松のつゆそでにれちきてそのかみを

　　　　しのぶなみだのかずをそへけり

墳墓の四境は、老松枝さしかはして、晝なほくらく、五百六十年餘のむかししのび出でられぬ、歸途。谷村の墳墓にも詣でたり、こゝなん北條英時が卿の首級を梟木にかけし所なるといふ、

二日福岡陸軍營の征淸紀念碑をみる、今度ぶんどりの魚形水雷を、其まゝつき建て碑となし、銘を彫りたるものなりとぞ、いとめづらし、

三日西公園の荒戸山にのぼり、神武天皇の遙拜終りてみわたせど、滊船烟をふきてはしり去り、帆船風をふくみてかへり來る。花に囀る鶯あり、水に鳴く蛙あり、天地の袋ゆたかにいとおもしろし、

四日筑紫郡。平尾の贈從五位、野村望東子の山庄趾をみにゆく、古砌の松は、女史をしたふ風聲あり、廢井の

水は、刀自が心の鏡に似たり、荒庭には神社あり、楠家歴代の神靈を、私に祀りし祠となんいへる、老女が糸島郡。姫島に流罪されて在りしときのひめ島の記をれもひいづれど、衣の袖は泪にいとゞしめりぬ、

こゝろなく鳥はなけどもきくひとは
　こゝろありげになみだこぼるゝ

五日東公園に元寇紀念碑をみる、湯地丈雄ぬしの發起主唱の盛なる、稱揚せんに詞なし、千代松原の逍遙に、かへるをわすれて日暮に及びぬ、

六日雨ふりけれど、萬町の汐湯浴みてくらしぬ、

七日雨昨日よりもいたく降る、終日うみくらして終夜眠りかねたり、

八日晴れたり、博多驛の下り滊車にのり、五十里あまりの道を夢のまに、熊本縣。鹿本郡、植木驛につき、是より五里ばかりの菊池郡。木野の妻がやどには、人力車より午後四時三十分かへりつきぬ、もゆるがごとき緋桃の花は門にひもときてまちむかへたり、

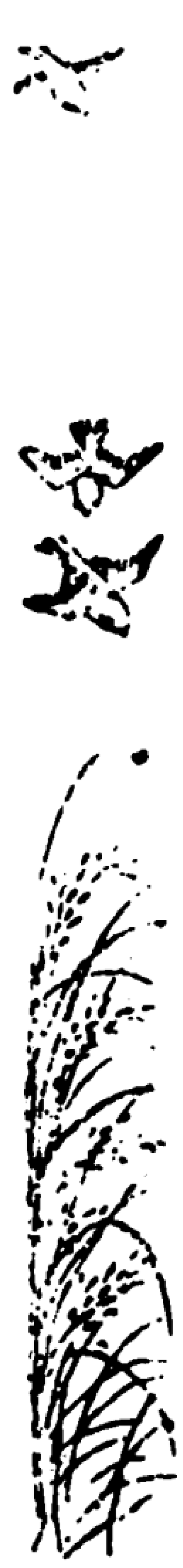
ともしびの緋桃のはなひたすらに
　かへりまちしかいまさかりなり

出でゆくときは、軒の紅梅かをりて送り、歸りくるころは門の緋桃にはひて迎ふ、あはれ毎春袖ふれし木末なれど、情なしともれもはれずて、此の紀行を紅緋の花笠と題し、松風文庫の奥つかたにひめれきぬ、

兼題

六月廿日
- 歌……六月大祓
- 文……子規を聞く

七月五日
- 歌……樹陰納涼
- 文……朝かほ



西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

女子處世論

定價金貳拾錢
郵稅金四錢
郵券代用一割増

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざるなり先き女史我が邦婦女子に其本分の在る所を示さんとして『女子の本分』の著あり本社之を世に公にするや再版三版忽ちに盡き四版の成るを告げたり世間高評の重き知るべきなり女史今又本書を著述し女子處世の心得を説く温厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺くべからざるの良書たり閑窓雨軒之れを讀む諸嬢の清快知るべきなり。

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社
（電話番號一九四六）

〔明治二十四年八月八日内務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

女鑑第百九號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十九年六月四日印刷
同　年六月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所(電話番號一九四六)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)